

振りあげ追ひやつて何をするかと見ると、小僧等は一日此の丘の上で竹の竿に糸をつけ、それで燕をとつてをるのである。こゝにいふ貧兒の残忍は實に憐れに思へる。小僧も去つた後に夕日の最後を見送つて眺める。丘の下を流れるテペロの河、そのうねりうねつて行く先のカンパニアには、先の聖パオロの寺が野中に聳え、その先オステアの邊は霞んで海か天か分からぬ。東にはアルパニの山々、その先の雪のアペニチ、北には近くアエンテチの丘の上の僧院から、ラテラノ屋上の石像、ロマ萬家のかたまり。西に轉して、小山つゞきの間には聖ビエトロの塔が特に高く聳える。それ等が夕日の茜に薄紫の色を染め、夕暮の空には寺の鐘がひびく。

この丘は土でなく土器のかけはしで出来た丘で、古羅馬の町に入つて来る葡萄酒の大徳利の片手をわつて納税した證據にした。その土器のかけ、納税のしるしだけが何百年かの間に二つの小山にな

りそれが眺めのよい高臺になつて残るといふのは妙な歴史の跡である。

丘を下りて市中に歸る頃には町には處々あかりがつき出した。テペロの河端にリエンチの家の壁や、火神の殿堂杯が残つて居る。

宿に歸ると松永君からの手紙が着いて居る。いそいであけると新聞の切りぬきが一つ、その中に文科(樺)の字が見えて、ポートの結果を始めて知つた。一ヶ月來の氣が、りが此で一掃された。尙委細の報知があり、特に今年は文科も法科も勝利で四年來始めての好結果である。うれしくてたまらぬが、話し相手もなし、新聞と手紙とをくり返し、手紙をかき、食後散歩に出てビールを飲んで歸つた。歸つて後宿の屋根に上ると月が清く空ははれて心地がよい。今から來年のポートの事が考へられる。

朝から日光の強い好天気。今日はテチリ(Tivoli)行きときめて、レンツォ門外に出る。市街鐵道のステーションにはテチリ行きの人一杯。その中に汽車は出る。市中を離れて、日のてりつめたカンパニアは草花の世界。咲いたも咲いたも、赤白黄紫の花が緑の野にべた一面。「カンパニア花の錦を誰がしきし」と自然に出る。土手の上の花が碧空に高くつき立つて見える。「青空に花をさゝげて土手の草」。

野は開け山は近くなる。願ればこの野外の澄み亘つた碧空の中に、ロマの天は煙か塵か、蔽ふてをる。どこにも市中には塵、野外には花。一時間ばかりでテルメといふ地で停車。硫黄の温泉が野の中に湧いて、川水は硫黄の色。その邊りには硫黄の臭ひ。それから少し行つて古代の殿堂の残りが野中にあり、次に停車した處がハド

リアン帝の別荘(Villa Adriana)の近邊。

汽車を出てその別荘の方に野中の道を行く。野の花も盡きて一むらのシプレスの森のある處が即ち別荘の入口。その木立の涼しい蔭を通つて丘の上には古の宮殿の壁のみ残る。その出来上つた時は大理石の色々ので飾つた壁も、今は煉瓦の骨ばかり出してつくり／＼と立ち、柱を飾つた彫刻の片はしが處々にころがる。或は大廣間とか哲學者の間、圖書館、衛士の詰所など、名は残つても、何れも同じ煉瓦の壁に少しづつ、床の奇石が見える。その壁の間、廻廊の中、行つても行つても同じ様な跡ばかりで、その間に笠松の姿のよいのが趣きを添え、シプレスが淋しさを添へ、而して地には草芒々の中に花が亂れさく。

カンパニアからロマの近傍全體を見はらすこの丘の上に大きな宮殿を建て、それを四季時々の遊樂地にし、貴族等を招いて大宴會を

開きもすれば、學者を集めて議論もする。この別荘に来て、曾て周遊した世界の名所を集めた庭に文人と共に散歩し、又はその宮殿の中に澤山な石像(今ワテカノなどにこゝから掘り出した傑作が澤山ある)の間に坐つては自分を神に比したハドリアン帝は支那の始皇、日本の清盛と共に大きな詩に詠すべき人物。この丘の上に擴がつた宮殿の跡、限りの知れない様な庭の跡は、大詩人が大きな作を感得すべき場所である。

あちらの壁の影にもたれ、こちらの石の柱に腰かけ、草にねては花をつむ。壁の破れた様な窓口から見える青空にシブレスが秀て、畫の様にあり、大廣間の跡の草花は錦をしいた様である。

あとふりし壁のすき間のあを空に、

畫かゝんとてやシブレスの立つ。

古の壁のみ残る宮の跡、

花のにしきに床かさりけり。

夏草のしげみしづけき宮の跡、

鳥も夢路をたどりげに鳴く。

初夏の日は近くの破れ壁から遠くの山々野原を一つの光りにとがした様で、草にねて空を仰ぐと、寂光世界の夢の様である。

シブレスの並木道を通つて門を出、馬車を僱ふて、一里ばかり山の上のテヴァリに向つた。ゆるやかな道を上るに従て山一面のオリヅ畑、その上にカンパニアの野原を見はらし、近くはテヴァリの町。少し遠くには山の頂上に一構へをなしてゐるモンテセリオ (Montecelio) の町。つゞいて野の先にロマの町は丘とも家とも分かぬ一かたまり、その中に聖ピエトロの大塔のみは著しく天に聳えて見える。

山も上り盡してテヴァリ (Tivoli) の町。馬車を下りてエステの別荘 (Villa d'Este) に這入る。宮殿の階段を下りて見はらしの縁側に出る。

その直下の庭園には大きなシプレスの林が天を突いて、その間に處處に瀧や噴水が見え、林を越しては一面に開けた山野の眺め。此處は廢墟ではないが、人も住まぬ宮殿にその大きな庭を眺めて四百年前の奢傲の跡を偲ぶ。

庭に下り、一段々山を下る。木立の間に泉の川が流れ、色々の石像が立ち、瀧の音に暫く淨世を離れる。然しルネサンスの餘り規則正しい庭は手の入つた割合に面白くなく、貴族趣味のいばつた様な作りの庭が荒れて、石像が壊はれかゝつて居るなど、榮華の夢のはかなさを覺える。その中にもシプレスの老木のみは天然の姿その儘に碧空を突いて立つ。

エステ別荘を出て、狭い汚い町を通りぬける。その廣場の料理屋の前に子供等が澤山たかつて何が見てをる。戸外に出た食卓に一人の黒奴の見事に黒いのが赤のチクタイにハイカラ風をして、それ

と一緒に年増の美人が白く白粉をつけ、派手な風をして食事をしてをる。何れアメリカ邊の富豪の女か何かで黒奴をつれてあるいてをるのであらう。餘りの黒と白とに可笑しくなつたが見るのも氣の毒の様な氣がした。然し本人は恥かしさうにもして居ない。黒奴の男めかけをつれて世界旅行をする位の女人に見られる位を何とも思ふ譯もないが、こちらが却つて顔を背けた。

町はどこも貧民窟。やつとそれを通りぬけて瀧のあるといふ邊に出た。下には川の流れもないが橋を渡つて瀧の公園に這入り、山の裾を下りると一つの瀧。山にトンネルを掘つてその入口から大きな瀧が落ち、しぶきに美しい虹を作る。尙下に又他の瀧が皆穴の口から落ちてをる。此の山は鐘乳石で出来て、川上から来る水がその岩の間をくゞり穴を作つて流れ落ちるのである。岩の穴などを通つて瀧の向ひ側の山を上り盡すと、そこに古代の殿堂の片われが

二つある。この邊の岩穴や瀧の邊にシビルやシレンといつて水女が住むでをるとして、それを祭つた堂の跡である。そこには堂のぐり、山の崖に机を出した料理店がある。そこにかけて崖の上から谷底を眺めると、岩穴の瀧があちらこちらにある。一寸妙な風景ではあるが、古から名高いほどにはなく、何となくおもちゃの盆景山水の氣がする。

四時半に汽車でテヅオリを去つた。道は山の崖に沿ふてテヅオリの町の對岸を走る。汽車の窓からは數多い瀧が一目に見える。谷間を出ると山上の眺めが又開けて、オリヅ一面の山の裾から、カンパニアを一目に見下す。平原に下りてからも野の草花の眺めや、そこらに草飼ふ羊の群の田舎らしいのも面白い。

宿に歸つたは六時頃、夕食にミスダグの家に招かれたからその方に行つた。レンドラム夫婦と、ウエルドといふ婦人の畫師と、フランス

人の伯爵夫人とが相客で、皆の間に色々と話しが出る。ミスダヴと美術談をしたが、その意見は中々面白く、自分の感じて居た點を能く言ひ表はしてくれた。建築でも畫でもピザンテンやロマチスクの美はうぶなやり方におちつきがあつて、その美術家が如何にも満足して作つた跡が見える。従つてそれを見てをればこちらもその心根に同化せられ、静かな満足を得る。ゴシクの美術はどこまでも活動向上を理想としてをるから、驚くべきものがある。仰いて見てその大きな高さに打たれる。然し限りない向上の氣象に満ちてこちらに満足を與へない。ルチサンスは總て之れ見よがしの風が多く、その極端は美術家の自惚を見せつけられた様で面白くない。自分も始終さういふ感で此等の美術を見たが、英國の婦人には段々この考への人が多くなつてをる。日本の禪味、風雅、しぶ味を了解してくれるのはイギリス人が第一である。

食事の間は謎の話で持ちきり、食後はミスウエルドの畫室に行つてその畫を見た。ロマ始めイタリアの諸處の風景畫が澤山ある。一つ／＼その場に行つて畫いたものであるから、こゝらの店先に出てをる賣品とは大に違ふ。カンパニアの花や、エチチアの河、アッシシの僧院など、天然のイタリアも美しいが、畫中のイタリアも美しい。尙レンドラム氏と日本の宗教の話をして、辭して宿に歸ると十時すぎ。アッシシ以來始めての愉快な一夕であつた。

五月十日、日曜の寺、音樂會。

今日は日曜であるが、ロマの日曜は朝から一向静かでない。その上むし暑くて不愉快な天氣。

十時すぎからマツジレの聖母寺 (Santa Maria Maggiore) に行つた。本堂の勤行は濟むで、おきの御堂に誦經の聲がする。その前に立つ

たり跪いたりして禮拜の人が澤山居る。暑い處をあるいて來たからだを冷かな石の柱によせて堂内の光景を見る。

この堂の起源は古いが、建物は段々に増して新しい分が多い。その縁起によると、四世紀に聖母が示現して八月の炎天に雪の降る處に堂を建てよといつた。それに従つてこゝに堂が出来たといふ。毎年八月五日にはその紀念に祭りをして雪の代りに白ばらの花を堂内にまくといふ。建物はバシリカ風で、角天井に石の柱の列であるが、城外の聖パオロの如く冷かな無趣味でなく、聖母の御殿といふ觀がある。その拜壇の上の寄石細工もラテラノのと同じ人の細工で中々よい。側の小御堂にも立派なのがある。

參詣の多い中に一つの懺悔室に坊さんが這入つて、その正面に旗でもあげる様な六七尺の棒を一本つき出した。參詣のものはその前に跪いて禮拜をすると、坊さんは棒をそのあたまにふれる。ベチ

デクションであらう。眞面目くさつて器械の様に棒の上げ下ろしをする坊さんの役もつまらないが、あたまをはられて禮をする信者もよいつらの皮に見える。然し此も信者にとつては有難いに違ひない。

歸りに聖カルロといふドミニカンの寺に行つた。此といふ事もないが、ドミニコの像と共にバドアのアントニオの像があつて、信者は頻りに禮拜をしてをる。アントニオには色々の祈願をするが、ドミニコには何を祈るのか、此等の信者が智慧を祈るとも思へない。學僧ドミニコも色々の祈願を持ち込まれては迷惑であらう。

午後は四時から音樂會があつて、コスタ氏の招待をうけたから、その方に行つた。その音樂堂は元はアウグスト帝の墓所で、瓦で積んだ宏大な圓い建物。それを修理して市の音樂堂にしてをる。ペートーゼンのコロオランの序樂からベルリオの「空想シンフォニー」に移

る。此は二度バリでもきいたが夢の様な空想戀の夢を音樂にしたもので、よくは分らぬ。コスタ氏はこの曲は説明音樂 (Programmusik) の變にこぢれたもので嫌ひだといつた。城外の牧者の笛の聲や、懺悔滅罪の行列音樂の外は、説明を読んで見ても、奇妙な調子、わざとらしいハーモニーの外一向分らぬ。

ベルリオの次にトリスタンの序樂と一緒にトリスタンの城塞内の最後が來た。序樂でのインルデの苦悶決心。最後に戀ひこがれつゝ心に愛情を味つて引きとる最後の二た息、三息。實に心情の奥の聲。自分は瞑目してきく、コスタ氏は最後に「此れでこそ本當の音樂でしやう」といつた。最後にはタンホイゼルの序樂。此もきゝ馴れて好きの曲ではあるが、トリスタンをきいた後には奥が浅い様な心地がした。

音樂堂を出てコスタ氏と一緒にイスパニア石段を上つて、この見

はらしから、夕やけを見た。アッシシの夕日は淨い光り、此處のは暑い色。その暑い色、熱烈の光りの空に聖ピエトロの塔が著しく高い。ローマの入日はやはりその人間の傲慢の氣象を反映して、ピエトロの塔はカトリック教會の權威を代表するかと思はれる。

五月十一日、傳道會學校、僧院。

朝早くワチカノからテンピエリ氏が案内に来てくれて、學校を見てあるいた。第一に行つたのはローマ教會の傳道を中心になつてを Propaganda di Fide で十七世紀以來の傳道の機關である。その長はカーデナル(ワチカノ政廳の參議)の一人で、學校と寄宿とは傳道者養成の事を管理し、書記と會計とは事務を掌つて、傳道會議 (Congregazione della Propaganda) はカーデナル十餘人で組織してをる。

學校に行つて、時間の中にその生徒を見る。色々の制服で、その所

屬の團體(例へばアメリカのコレツジとか、傳道會自身の寄宿舎とか)を示して、世界中の國々から集まつて、日本人も一人その中にある。國々から來て各々言葉は違つても、教場ではラテン語ばかりであるから、少しも差支はない。然しそれと同時に教科は多くは中世以來定まつた課程で、新しい事には觸れない。哲學、文學、歴史、物理などを經て、終には神學を中心にする。アメリカのジュスイトの大學では哲學史は英語で教へて居たが、こゝでは特に哲學史を教へない。心理なども哲學の中で教へる。哲學の教場ではまだ講義が始まらない。物理の教室を見たが、此は固より通常の物理の教授で、學問といふよりは、傳道の實際の方に使ふらしい。新教の傳道學校では醫學も少し教へるのがあるが、こゝにはない。學校の下には印刷所があつて各國の言葉で書物を出版する。

書記部の方では世界各洲に分けて事務を掌つて、その記録類は十

七世紀以來のが、大きな室一杯にある。この記録類を研究したら、面白い傳道の歴史が出て来るであらう。終りに會議室に行つて、それから二三の教授達に會つて、その家を出た。この學校の教授に近頃一人異端者があつて騒いだそうであるが、今はその人を免職してそれで事は済んだ。

一見した所で學校としては此といふ特色はなく、他の神學校などと同じで、カトリックの神學者を養成する、その人を傳道に出すといふだけであるが、その學校が世界傳道の中心になつて、傳道會議は他の傳道會(例へばパリやリオンの)を支配し、寄附金も萬國から集まつて来るから、その仕掛は大きいものである。

それから近傍にある聖ジュゼツベといふ學校を見た。この學校はフランス人ラザル(Jean-Baptiste Lazare)といふ人が始めたラザル團體の學校で、子供等に工藝學校の豫備と普通教育とを授ける處である。

このラザル團體はさういふ様に俗人の子供を教育する僧團で、フランスで起つたが、今はその學校は閉鎖を命ぜられてフランスでは見る事が出来ない。入口の小さな中庭に聖母の像を祭つて草花が澤山捧げてある。僧院に行つた心地がする。校長はフランス人の老僧で、愉快げに迎へてくれて、愉快に話しをする。入口の中庭を過ぎて尙一つ中庭があつて、その広い廻廊と共に子供の遊戯場になつてをる。生徒は七八歳から十六七まで、三百人。その中半数は學校に寄宿して衣食住共に學校で支給する。經費は一人に一年千フラン平均になるとの事。その他は家から通うて居るが、授業料などは固より取らず、書物や器具は皆學校からくれる。朝の八時に會堂に集まつて禮拜をし、十二時に學校全體で食事をし、三時半に學校がすむと、教員が子供等をつれて散歩をして、六時から復習をさせる。教場での教師の外に各級につきさりの教師があつて、質問に應じたり、散

歩につれて出たりして全く父兄に代はつて世話をする。日本でも
曉星學校などはやはり此の組織であるが眞の教育はさういふ工合
に教師が父兄に代はつて子供を世話しなければならぬ。カトリック
の學校は此の點では世間の學校に勝れて生徒と教師との間が親し
い。教員は俸給のためでなく、自分を投じて子供の爲めに盡す。教
場を一二見たが教員も副教員も皆ラザル團の僧で、黒の着物に白の
襟かけをして、子供等と友達の様にしてをる。授業の中休み十分は、
付き添への副教員が生徒を中庭につれて出て、一度整列させてそれ
から勝手に遊戯をさせる。年とつた校長までその間に交つて子供
と一緒に遊ぶのを見て、實に愉快に感じた。

會堂は通常の寺であるが、正面には聖ヨゼフがキリストを抱いて
をる畫、それからキリストが子供になつて示現した聖アントニオ、こ
の團體の開祖のラザルなど、キリスト教で子供に關係のある聖者の

像が祭つてある。食堂は白大理石の机で實にうつくしい。建物の
奥には木立の茂つた廣い庭園があつて、ピンチオの丘の麓に沿ふて
坂路が木立の間にうね／＼してをる。見上げると庭の木立を越し
て、丘の上メデチ別荘の林が碧空に蒼く、子供は外出せずとも學校の
庭で春の花、夏の木立の間に遊び得る。日本の學校にも尙多くこん
な庭園を作らなければならぬ。只庭園を作るばかりでなくて、子供
等に、そこが自分の内である様に思はせなければならぬ。内の様に
思はせるには教員が親切でなければならぬ。日本の佛教者も、文部
省の指命に應ずるだけの學校でなく、信仰のある教育、眞に子供を可
愛がる教育をしてほしい。カトリックの僧達が自分の身を捧げて親
切に教育してをるのを見習はなければならぬ。

意匠や圖案の教場で見たとが、その室から庭や丘の眺めは實
によい。校長はにこ／＼して、美術を教へる部室には特に神の恵み

の見える様にしたといつた。生徒が花を眺めるといけないうつて、學校内の櫻を切つた日本の校長と比べてゆかしい。學校の出口の一部屋は、教員の集り場と卒業生の會所になつて、玉つき始め色々の遊戯も出來、書物も備へ、又聖母や、學校關係の人の畫なども多くある。この學校を出たものは進で他の學校(特に官立の工業學校)に行くのであるから、元の學校を忘れないと同時に宗教の感化をなくしない様に特に注意してあるらしい。イギリスの大學は元の僧院教育がゼントルマンの教育に變じたもの。この學校は僧院教育の精神を維持して、世間の宗教反對の教育に對して抵抗したものである。英國の方は自然の進化で、イタリアの方は一つの争闘である。

學校を出て少し一緒に散歩して後テンビエリ氏に別れて宿に歸つた。今日から馬車の馭者がストライキをやつたので、市中には乗合馬車の影もなく、町が靜かに見える。つい手にオートモビールの

馭者もストライキをやればよいにと思つた。

午後は又テンビエリ氏と一緒にラテラノの方にあるフランシスカンの尼僧院に行つた。この尼僧院はマリアの傳道フランシスカン (Les Franciscaines Missionaires de Marie) といふ團體の本部である。場末の貧民の家の間に一つ眞白の石で築き上げたゴシック窓の家で、横の方の小さな戸口の鈴をおすと、戸をあけて、眞白の着物に眞白い頭巾を着た若い尼が出て來た。「母上」(Mere) といつて尼寺の長を母と呼び、尼達は皆姉妹 *Sœur* と呼ぶに會ひたいといふと、應接室に通してくれた。二三の畫像の外は何も裝飾のない室で、間もなく、母上が二人の姉妹をつれて出て來て挨拶をする。長老尼はフランス人で年輩五十六七にもならう。顔の皺には中々苦勞の跡を示してゐるが、そのしつかりした顔つきの中に溫和な相があつて、品格のある有徳らしい老尼。ついて來たのは共に三十餘りの尼で、一人はイギリス

人であるといつて始めから英語で話す。老尼ほど圓滿ではないがしつかりした中々鋭敏らしい、身體も丈夫らしい人。他の一人はイタリア人ではあるが能くフランス語を話す。おとなしい風で、アッシンにあるマルテニの筆のクララ尼の顔つきに似てをる。三人とも先の案内の尼と同じ服装で、頭の先から足の先まで雪の如き白衣で、胸には象牙の十字架をかけて、さらさらとした白衣の上に一層清く見える。長老は先づ云つた。「私共の精神は聖フランスの慈悲を實行するのが主眼ですから、傳道も慈善と離れず、慈善の第一には尼にも亦他の婦人にも仕事をさせます。此の僧院は半分は仕事場です。それから案内して石段を上り、三階目あたりの一室につれてくれた。その室は畫と圖案との室で若い尼達が三四人と外から來てをる娘が二人と、皆各何かの畫を寫したり下書きをしてをる。自分の意匠で畫くのではないが、油畫なりチョークなり、中々技倆は進んだもの

で出來上つたのは壁にかけてある。聖母の畫もあればラファエルの聖セチリアもあり、又圖案もある。羊の皮に古風の模様や古風の字をかけた圖案が一つの箱に澤山納めてある。皆各地に傳道に出てをる姉妹達から本寺の母上に送つて來たもので、祈禱の書いたものあれば、母の尼に感謝の意を表したのものもある。次の部屋はレースを作る室で、此處にも尼達が眞白の仕事服を着て精巧なレースを編んである。一寸四方位を作るにも一日も二日も全力を盡すので、これらの店に出てをるレースと全で違ふ。細かな美しいレースが尼達の白衣と共に白く、一室盡く淨い白色の世界である。テンピエリ氏はそれ等の細工を見廻つてをる間に、母の尼は尙詳しく此等の仕事をさせる精神を説明してくれた。

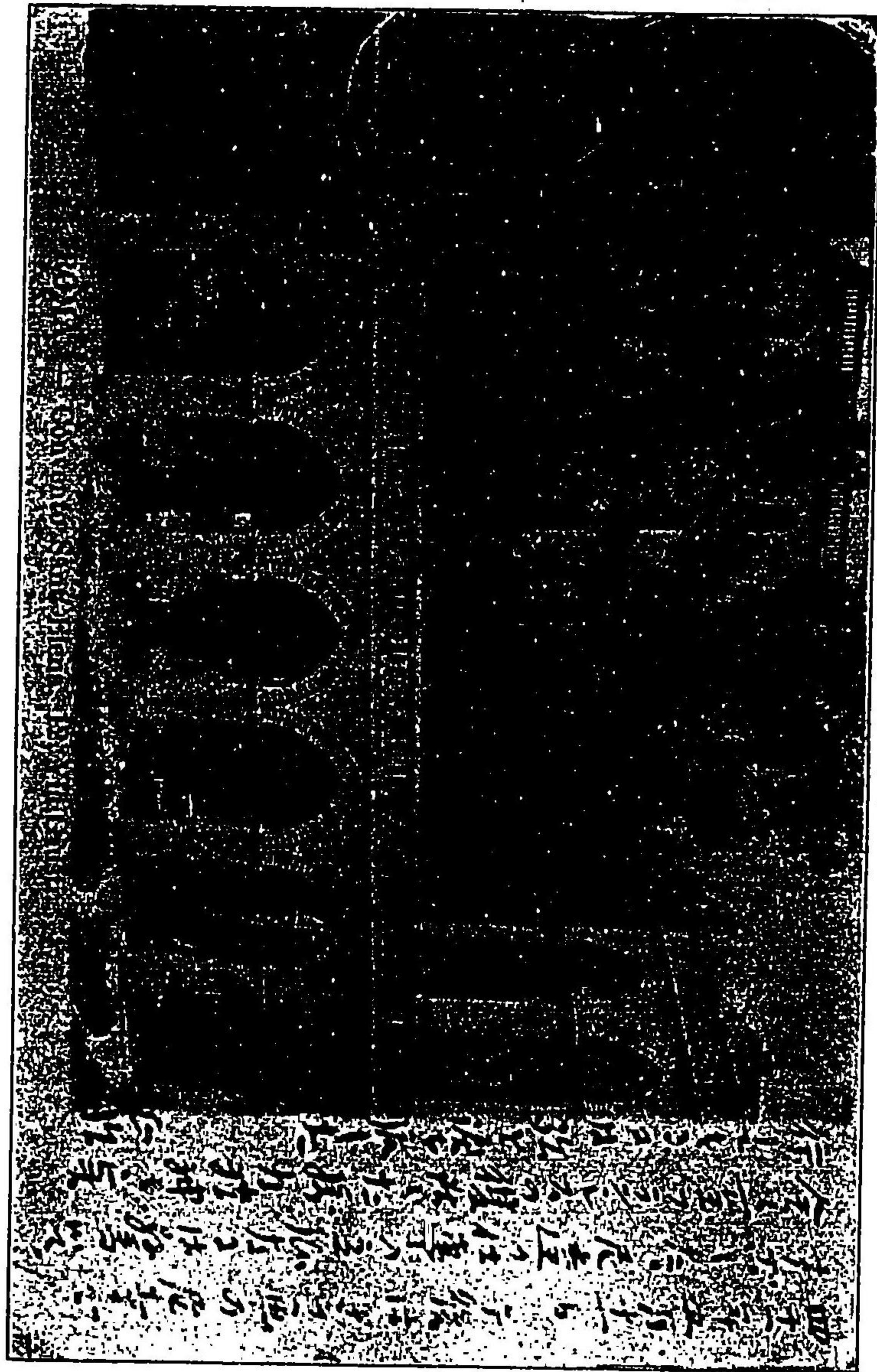
「今の社會には不平があつたり、社會主義や無政府主義が亂暴もするが、その原因は怠惰と不經濟とから出てをる。男子の事は別にし

て、婦人が第一家の經濟を知らぬ。經濟の氣がなくて一家を亂すのは、つまり楽しんで仕事をしないからで、仕事を樂む風を缺くから、憎けて而して色々の奢りばかり見做ひ、身分不相應の暮しをしたがる。身分不相應の事をしたがるから不平も起り、其不平が經濟の紊亂に煽を煽られる。社會問題は經濟問題であるがその實道徳問題で、道徳問題は即ち信仰の問題である。聖フランシスの精神は一意に神を信じてその恵みを有り難く思ひ、その有難さを思ふ精神で、人が各其仕事をするにある。それ故この傳道團體は、尼にも婦人にも何なりと好む仕事をさせ、仕事を樂む様に導く。仕事を樂めばその中に信仰も出來、又不平も起らず、一家でいはゞ經濟も治まる。婦人の第一の徳である淑徳 *Moderate* はこの勤勉の中に生じ、淑徳と共に節操も固くなり、又進んでは慈善の心も起る。尼寺ばかりでなく一家の中でも婦人の勤勉を勵ますのが傳道の第一着である云々。しとや

かに而かも力のある能辨で、顔に熱心をあらはしてこの説をきいて、而してこの一室に尼達が皆孜孜としてレースを編んでをるのを見、又母の尼始め皆が清淨の服裝を見ると、いかにも淑徳節操の事實が目の前に示される。而してこの團體の尼達がこの節操、勤勉を擴げて慈善事業を起し、世界各國に癩病院を起して、不幸の病人を世話してをるのをきくと、此等のかよわい尼達の白衣の中にしつかりした信仰の力、燃ゆるが如き慈悲の心を貯へてをる事を深く感ずる。次の部屋は縫仕事の室で、錦の糸で、花や、聖者の像などを一針々と縫ふてをる。出來上つた細工の中には儀式着の法衣もあれば、又壁かけの縫畫もある。先の室の白いレースと對してこゝには金碧の立派なものが出てをる。母の尼は日本に行てをる姉妹たちの報告にも、日本の女の子はこゝにいふ縫の仕事が上手ださうで、久留米の傳道所でも特に縫仕事を多くしてをるさうです」といつた。此の

團體の傳道所は久留米と札幌とにあつて、久留米では、四五十人の癩病者を收容してゐるとの事である。

その次の室は皮細工の部屋で、ふと机の上にある皮表紙の厚い本をあけて見ると、この團體の傳道所の寫真で、三千の姉妹が世界の各所に慈善や傳道の仕事をしてゐる光景が一目に集まる。その本の皮表紙は固より、その寫真も皆姉妹達のとつたもので、先の縫箔の部屋にあつた縫ひの寫真も皆人手を借らず、尼達で寫すのである。ここにある皮の細工は、これらの店に出て居る器械おしの細工と違つて、一つ／＼針の様なへらでおして、皮の上に色々の畫や模様を出して作る。仕事を樂み信仰に助けられて忍耐するものでなければ出来る仕事でない。その次は印刷部屋で、一人の尼が禱がけで銅版の聖母像を印刷してゐる。銅版の下書きも彫りも皆一手である。一枚々々摺つては、樂しさうにその出來ばへを見てゐる。自



傳道ラウンジのカニ本寺

分が意匠して銅に彫つたものを摺り上げて、その出来ばへを喜ぶことに仕事の楽しみはある。近世の工業には分業が行はれて、意匠と彫りと摺り上げと一々違ふ人がするから、一人で仕事の始終に氣をつけない、従つて仕事の不親切になるのも無理でない。

それから下に下りて、會堂には外から來て禮拜する人が入口に、内部の尼達は拜壇の上に跪いて祈念をしてをる。會堂の建築だけは人手を借りたが、その外の窓ガラスから、裝飾、聖像、皆内の尼達で仕上げたと説明せられて、一層尼達の萬能に驚いた。日本の古代の高僧が繪も畫けば、木像をも彫つた昔が偲ばれる。而して此は即ちフランスシスカンの特質である。

會堂を出やうとする時に、夕暮の勤行に數人の尼達が白衣姿の行列を作つて這入つて來た。その光景はロヘンゲリンのエリザの出で來る時そのまゝで、この光景は芝居でなしに實生活である。それ

から庭に出る。ゴシクの穹窿で支へた長い廻廊に囲まれて大きな中庭があり、柑類の木の茂みの間に白い花が亂れ咲く。廻廊は上と下と二重になつてそこにもあらゆる花の鉢が並んで特にその一角の聖母像は野菊の様な白い花で圍んである。白石の廊下に白菊の花、白衣の尼姿がその間に逍遙する様は清淨の權化とも見える。長老尼はこの廻廊が即ち尼達の散歩場である事を説明して、尙いふには「世間では尼寺といへば陰氣な處の様に思ひますが、此處には常に花が咲き、神の光りが照り、妹等は始終楽しんで仕事をしては、又この廻廊や庭に出て楽しく天然の恵みを受ける。此が即ちフランシスカンの精神である云々。實にその言の通りに聖フランシスの精神が活き／＼と尼寺全體に満ちてをる。眞白の姿の尼達が廻廊をあるいて、白花の聖母の前に跪く様は、壁一つ隔て、外の世界の汚いに比べて特に淨く氣高く見える。その上この長老尼を始め尼達の快潤

な風は、それに接するものに爽かな感を與へる。この廻廊にこの團體の開祖を紀念してその生死の年月など彫りつけてあるが、その名はシヤポタン (Hélène de Chappotin) といつて、千八百三十九年五月二十一日にチウヅルで生まれ、千九百四年の十一月十五日にイタリヤで亡くなつた。この事業を始めたのは八十七年一月六日で、即ち四十八歳の時、フランシスカンとロマ教會とから允許を得て、公認の團體となつたのは、それから九年の後、一八九六年五月十一日であつた。傳記は今材料を集めて編輯中との事であるから、それが出たら餘程面白い事實があらうと思へる。兎に角、創立以來二十年の今日に三千人の同行姉妹を得て、世界の各地に事業を擡げたゞけでも、驚くべき事業の才のあつた人と思へる。その信仰は詳しくは知れぬが、フランシスの精神を七百年の後に事實に復活したので見ても、深い信仰のあつた人に違ひない。

廻廊を廻つて居る間に家の中には夕の勤行の歌がきこえる。會堂の後の集會室を見て後、別れをつけ禮をいつてその家を出た。この尼寺から遠くない處にフランシスカンの僧院があつて、その僧團の長者(Minister general)の住處、又中央の學院になつて居る。僧院に這入つて二階には僧等の笑ひ聲がきこえる。尼寺の開潤で清潔なのに比べては、こゝはやりつばなしで、僧房の並んだ廊下には花もなく、飾りもなく、實に質素の作りである。尼寺の方がフランシスの理想の徳、節操の代表とすれば、こちらは清貧の代表である。長者は不在でその代理の人と三四人の教父が出て来て手を握つて舊友を迎へる様に迎へてくれた。その中にアッシンで遇つたロビンソン教父も居つて、互に再會を喜んだ。夕方に薄暗がりの廊下を通ると、學院の徒弟等が散歩の時間に外出するので、廊下は一時繩帶の僧で充たされた。

二階、三階、四階と限りなく僧房が並んでをる間をぐるぐると通り、屋根の上に出る。夕日が恰も西の地平線に入つて、聖ピエトロの圓塔はその名残りの燃ゆるが如き光りの中に屹立してをる。ローマの町は一望に集まつて、北はピンチオの丘、西はジアニコロの丘上、松の木が夕日の空に墨畫をかき、東には近くラテラノの寺を越してカンパニアの野原からアルパニの山々を見はらす。直下には僧院の畑に豆などの野菜が青々と繁り、とちの木、青葉の間にその白い花が房をなしてをる。外出時間以外にはこの屋根が即ち僧侶の散歩場で、世を捨てた人が世間を眺め下す場所である。ロビンソン教父はカピトルの丘にイタリア先王の記念碑の足場を指さして、あれがわし等の昔の住家であつたが、政府の力でこゝに移された、どこに行つてもわし等の精神は同じだといつた。カピトルの丘の上、閑靜な古僧院の方がこの新しい市中の家よりよかつたに違ひない。然しアラ

ンシスは三界に住家のないを理想にしたのであるからその僧院もどこにあつてもよからう。但古の僧院の木立の庭ゆかしい塔もあつたさうであるが、その跡に石ばかりの記念碑、例の乗馬の恐ろしい像が立つのは、ローマのためには惜しいものである。

屋根を下りて、學校の教室を一二見たが、質素な机椅子の外には何も無い。フランシスカンの傳道者が世界の各地から送つた品々を集めて、傳道参考の博物館が出来てを。此も別に奇はない。それから圖書室は實に立派なもので、二十餘の室がづらりと並んで、分類整頓がよく出来てを。元の僧院には數百年來の書類があつたが、其等は皆政府に沒收せられて、今あるのは十餘年來に集めたものだけといふ。フランシスカンの始めは學者になるのが目的でなく、平民の福音であつたが、丁度淨土宗や眞宗も段々に宗乘の研究で議論が盛になり、學問が盛になつた様に、この僧院でも暫くの間これだけ

の書物を集める程學問をする様になつた。この僧院の學校もやはりその爲めで、各國から來た徒弟がこゝで學問をしてからこの團體の教父となる。圖書室から下には討論室があつて、一週に二度學生が集まつて宗義の討論をする處になつてを(用語は勿論ラテンで四方の壁にはこの派の學僧聖ボナゼントラやレオナルドの肖像がある。その畫は皆僧院の法弟の手に成つたものである。

尙下には廣い厨房と食堂とがあつて厨房には法弟が前垂がけで働いてゐる。その風は禪寺と同じである。パンは固より葡萄酒もチーズも皆法弟等が造る。その外衣類や靴まで皆僧院の中で出来る。食堂は教父教師の方と學生の方と二つに別かれて、何れも四壁に沿ふて坐り、その前の木の机に食事を並べる様になつて居る。その一方には講壇があつて法弟が代り、その上に上つて食事の間讀經する。此はどここの僧院も同じである。歸らうとすると、一つ

酒を飲んで行けといつて、ちやんと机の上に用意がしてある。酒に添へて何を食べるかといふから、フランシスカンの寺ではパンを貰ふのが一番愉快だといふと、皆は笑つて、それならパンにチーズを附けて上げやうといつて、葡萄酒をつぎ、パンにチーズをくれる。薄暗い食堂で前垂がけの法弟に給仕をして貰つて、教父等と話しながら酒を飲みパンを食ふ。オックスフォードのコレッジの食堂で食事をした時を思ひ出す。威儀を整へ禮を盡して禮拜の後に食事するオックスフォード流にはイギリスの精神が表はれ、この食堂で快談高笑して酒を飲みパンをかぢれば、いかにもフランシスカンの清貧に安んずる理想を味ふ。(日本で葡萄酒といふと奢りであるが、こゝでは茶を飲む様なもの)。

それから最後に會堂に這入る。拜壇の奥の天井にはキリストを中央にして、フランシスを始め、この派の聖者學僧が寄石細工で畫い

てある。畫風は近代のものであるが、此も皆法弟の細工だといふ。その外、堂内の畫や裝飾も皆手細工である事は先の尼寺と同じである。フランシスカンにはどこまでも天然に親み美術を愛する精神が實行せられてをる。畑で野菜を作つたり、靴や細帯を造つたり、料理をしたりする法弟等が又畫を畫き寄石細工をする。アメリカではこの精神を學校で行つて、アメリカ教育の特色と誇つて居るが、フランシスカンの僧達は數百年來之を僧院で實行してをる。

會堂には參詣祈念の人々の影が、燭光の影に黒く見える。堂を出ると入日の名残りはまだ残つて、空一面に薄紅の光りを放つてをる。教父たちに別れを告げ、禮をいひ、テンビエリ氏に別れて宿に歸る。その路でマツジョレの寺の塔を見上げると、月が東の空に淨い光を放つて居る。入日の光が熱烈の太陽の名残りを止めてゐるのが、フランシスカンの僧達の學問や活動に比べ得るなら、淨い月の色はその

尼達の淑徳に比べ得るであらう。

五月十二日、尼衆團の學校。

今日も昨日に同じく愉快な經驗を得た。ピンチアナ (Porta Pinci-
na) 門を出て城壁の外、ボルゲーゼ公園と隣つて立派な宮殿作りの
家につれてゆかれた。此がアッシンブシニスト (Assumptionistes) といふ
尼の團體の家ときいて、その家の餘り貴族的なに憚いた。玄關先には
ローマ古代の石像が立ち、應接室に行くまでの石段も大理石のしき
つめ、柱も立派な石。應接室に待つて室内を見ると、壁にかゝつてあ
る十字架の外は、全く宮殿の様である。間もなく長老尼が一人の妹
と共に室に来て、始めに「私はイギリス人です」と説明し、英語ばかりで
話しをしてくれた。その話しでこの家の由來が分かつた。元來或
る貴族がその御殿に作つた家で、僧尼寺なり、學校なりには餘り適し

ないが、位置が城外で公園に近く空氣がよいから、この家を借りて多
少改造をして僧院なり學校に使つてをるのである。學校は上流社
會の女の子を教育するのが目的で、四ヶ國の言葉を必修科にして、そ
の他音楽、繪畫、歴史を主にしてをる。尼達は色々の國の人が集まつ
てをるから、各その國の言葉を教へるなり、又技能に應じて教授をし、
その外必要な分は外から教師に来て貰ふが、生徒は總て寄宿して、尼
達が母となり姉となつて萬事を世話する。この説明を前置にして
から教場の方を見に行つた。

このアッシンブシニストの制服は着物はフランシスカンの僧の様に
褐色で、頭巾は白く、胸に白い十字架を縫ふて。昨日の尼寺の眞白
の服ほどに神々しくは見えないが、胸の十字架は古の甲につけたの
に似て、一種戰陣風の趣がある。教室授業など他の學校と大した違
ひもない。音楽と語學とは非常に奨励するが、繪畫や圖案は餘り進

歩して居ない。寢室は立派な御殿作りで、三十人位の寝る室が三つあり、一室毎に尼さんが二人づゝ寝る。他の尼達は地下の室に寝て子供等には最上の寢室を與へてあると云ふ。

學校の方から附屬の幼稚園に行く。こゝは貧民のための幼稚園で、衣類と中食とを支給してをる。二つ級になつてをるが兩方とも唱歌や遊戯をして見せてくれ、それが終つてから菓子子供にやつてくれといつて、日本のおぢさんがイタリアの貧民の子供等に菓子を分けてやつた。貧民の子だけで、ひつたくる様に取つて行つて禮をいふのも忘れた子が大分あつた。

午後はピア門 (Porta Pia) 外の尼學校に行つた。城門を出る時にテンピエリ氏は、イタリア軍がこの門からロマに遁入つたのだと教へてくれた。此は六十年前に今の王室がイタリアを統一したが、ロマは尙法王の治下にあつて王室に服従しない。王室も國民もロマ

に都をすゑて古のロマ帝國の面影が見たいため、終にロマを攻撃した。千八百七十一年九月二十日にこの門を破つて侵入して、今の王宮でその時の法王宮であつたキリナレの宮を砲撃し、法王はワチカノに逃げ、それから王室と法王とは今に犬猿の間柄で居る。ワテカノの人達にとつてはこの門は遺恨の跡である。

門外で町はづれに近い處に大きな殺風景な家がある。此が即ち聖ウルスラ (Sainte Ursula) といふ尼の團體の本寺で、尼僧院兼學校である。この派はフランス人でアンジュエといふ尼の開いた團體で教育事業を目的とする。この院ではその尼達の教育養成をすると同時に、七八歳から十七八までの女の子の教育をし、あらゆる階級のものを入れ、生徒の三分一位は給費生で院の中に寝泊りをしてをる。長老はフランス人で、六十餘りの如何にも肥え太つた體で案内をしてくれた。従者の中にはアメリカ人もあればドイツ人もある。松

の木蔭になつた広い庭で子供の遊ぶのを見て、それから家の中で、尼僧の僧房、長老の事務室、會議室を皆見せてくれた。長老の應接室は木の格子があつて、來客と格子を隔て、話しをするのである。考へて見れば尼寺に男は入れない。それに此の様に見せてくれたのは法王廳の特許であつたので、昨日以來知らずに居て此處に來て始めて話しをきいて氣がついた。特別の待遇ときいて長老に禮をいふと、禮はワテカノに云つてくれといふ、いかにも道理である。尙教場を見、子供等の音楽をきかせて貰つて、それから屋根の上上がる、テグオリからアルバノにかけて、東北のカンバニア一面を見はらす。長老の肥つた體で段を上るのが苦しうであるから、氣の毒だといふと、何年目でこの屋根に上る、常は中々家の中だけでもあるけないといつて笑つた。

歸りがけにゴードのお母さんの處に行つたが、日の暮の散歩時間

で今日も不在。

五月十三日、イシドロの寺、大學、フランシスカンの靴。

朝早くにフランシスカンのロビンソン教父(P. Robinson)が尙他の一人の教父(名はポールド^{ホーン})と一緒に來てくれ、皆で聖イシドロ(San Isidoro)の僧院に行つた。この寺はフランシスカン派の學僧の多く出た處で、有名な哲學者のダンススコトス(Duns Scotus)もこゝでその書物を書き、ワッディング(Wadding)もこの寺に死んでこゝに葬られた。講義室にはそれ等の人々の肖像が壁畫になつて居る。圖書館には古い書物が多くあり、ダンススコトスの古い版本や、ワッディングの全集など面白いものがある。中庭を見、僧房を見、屋根の上から四方を眺め、食堂で饗應をうけた。いつもの如くに葡萄酒にパンで三人が面白く話し、僧院生活の一部を味ふ。食堂にはフランシスカンの人

人が日本で殺された畫がある、古と今とを比べて妙な感じがする。インドロを出て、天壇聖母の寺に行つた。此間は鐵柵の外から見ただピンドリキヨの畫を堂の中に這入つて見、その他この寺の古の話など多く聞いた。十一時にルツァッテ氏と大學で會ふ約束があるので、二人の教父に別れて大學に行つた。宮殿作りの家の石段を上つて案内を乞ふ。書生連中が集まつて来て見世物を見る様にして見る。ルツァッテ氏は出て来て、いつもの様に平民的に應接して腕を組んで廊下をあるきながら話しをする。イタリアの財政を整理した一國の重臣が外國の若い學者と腕組みをして話しをしてくれる。書生等の驚きも無理でない。

宿に歸つて中食後讀書室に居ると、フランシスカンの二人の法弟が来てくれた。一人はドイツ人、一人はベルギ人、朝ロビンソン教父にフランシスカンの靴の話をして、一足ほしいといふたので靴を

造るために、足の型をとりに来てくれたのである。フランシスカンの法弟に足の型をとらせて、キリストがその弟子の足を洗つたといふ話しを思ひ出した。足の用事が済んで二人に茶を出して話しをする。二人とも實に無垢の人間で、まるで子供の様に無邪氣である。フランシスカンの感化が今日まで残つてこの子供の様な僧に靴を作つて貰ふと思へば、一層聖者の生存の時が偲べる。

夕暮前に龜山書記官が來られて、夕食はその招きで料理屋に行つた。屋根の上、薔薇の柵の下で、日本語を話しながら食事をして、實に愉快。それから散歩をして、カフェの外でビールを飲みながら長い間話しをし、別れて歸り路に月が清い。

五月十四日、シロッコ風、學院の食事、公園。

朝から暑い、シロッコといつて南の風が吹く。乾いて暑くて砂をあ

げ、時によるとアフリカの砂原の砂までもつてくる。ロマに来てから時々シロコもあつたが、今日ほどのは始めて。室に居れば暑い、外に出ても暑くてごみを被る。同宿の婦人で誰れかわき香の強い人が居て、廊下のむし暑い空気にわき香が充ちて實に不愉快。

午前は部屋で讀書をして、正午からはケンチデー氏に招かれたから、そのアメリカ學院に中食に行つた。空は一面に灰をふらした様である。學院では院長始め皆一緒に食堂で食事をする。食堂はオックスフォードなどの様に細長く、兩方の壁には學院から出た人等の肖像がかゝつて、つきあたりの院長等の机、それに對して學生の机は壁に浴ふて並ぶ。百三十人の學生がその黒紅の制服で這入つて来て、食事を始める前には机の前に立つて並ぶ。一人が高い處に上つてラテン語で祈禱文を讀み、皆がそれに和し、終つて食事を始めてからは、又英語で聖書を讀む。自分は院長と監督との間に坐つて食事

をし、學生が最後の祈禱をし、祈禱文を唱へながら食堂を出て行つた後に院長の室に歸つて、カフェを飲みながら、ロマの話しをきき、日本の事を話しなどして歸つて來た。

五時すぎには少し風がないで來た。外出して、ウァットリアの聖母といふ寺に、そこにある有名の石像を見に行つた。白大理石の像が象牙の様に光つていかにもうつくしいが餘りうつくしくていやになる。聖テレサが死んで雲にのせられ天に上る、そこへ天使が來て愛の矢をその胸にささうとしてをる。天使の顔のなまめかしいのや、その矢を持つてをるなど全くギリシヤの神話で、キリスト教の考でない。ルチサンスの末の墮落の代表である。その外堂内の裝飾や石像は、パロコノの飾りすぎたもので、日光の建物を見るよりも一層いや氣が差す。

ゴードのお母さんの處から丘づたいにピンチオの公園に行つた。

丘の上からロマの町の眺めは同じであるが、シロッコでロマ全體は烟に蔽はれた様にかすみ、カンパニアは一面灰の海。大空は雲か烟か砂か分からぬ様に一面に黒く、近邊に大火でもある様である。その中にも燕はいつもの様に空を飛んでピー／＼鳴いて居る。然しその姿は黒くて大空に黒ごまをまいた様に見える。日のくれの寺の鐘も何か警鐘の様にきこえる。古からこのロマで色々の騒動一揆が起つた事は數知れぬ。貴族と平民との争ひ、貴族の間の戦争、而して此頃は又ストライキの騒動など、ロマの町は修羅の巷をくり返した。今日の空合が何か修羅の世界の様に見える。元來感じの強い上に、殘忍で又利己心の強いロマ人等が、常々不平があつたり、野心がある、それが今日の様な天氣にむしやくしやして一時に破裂するのではないかなど想像した。

この天氣でも公園の青葉の下を通れば、幾分か氣も涼しくなる。

草花を見ては心ものびる。馬車で奢侈を競ふ人等の派手姿、馬車の行列、貴婦人の展覽、その間に樂隊が樂を奏して、子供等も遊んで居る。石ばかりの家の中に住んで、その上シロッコの吹く日など、こんな公園でもなければ人間は生きてをられたものでなからう。日本人は貧民でも今までは各自分の家に庭を持つて居たから、此れほど公園の必要がなかつた。然し此から段々家が建てつまると、公園の必要が多くなる。公園のまねはよいが、ロマ人の様な修羅争闘のまねを日比谷邊にやらない様にしたものだ。

夜は大分涼しくなつて蘇生の思ひがする。散歩に出て、王宮前の花園に行くと、かすんだながらに月はてり、青葉がくれの電氣燈が涼しく見える。

五月十五日、再びアンジュリコの藪、バラテノ丘上の半日。

朝からワテカノに行つた。ラファエルの畫の前あたりに見物の人が群集してをる中をすぎて隔つたニコロの堂 (Capella Nicolo V.) といふ小さな御堂に行く。こゝにも随分見物の人が多い。然しそれ等には頓着なしに、その堂の壁畫でアンジエリコの筆を見る。清い色で信仰に満足し喜悅した顔つきの人々を畫いて、聖ステファノと聖ロレンツォとの一代を造り上げてある。その前に立つところからも畫中の人物に同化して奥の深い静かな喜びを得る。市中をあるけば、どこも石のごつ／＼した家や寺に、人の顔は野卑か強欲か淫亂かの様に見える。この壁畫は聖者の一代記を物語るものであるから、配合も複雑で又活動も多い。アンジエリコの他の畫の様に寂靜の姿ばかりでない。アンジエリコもこの様な題目を畫くためか、又はロマに來てはフレンツェの僧院生活と多少違ふ心持になつたか、中々活動を畫き雜多

の人物を配合した。然し始終神の光りに接し天使を見たアンジエリコの眼には、悪人は映じないと見えて、ロレンツォを焼き殺してをる人間も、ステファノを石でたゞ殺してをるユダヤ人もそれ程の忿怒相を表はしてゐない。ロレンツォを審問して居る判官もおとなしすぎる感がある。ロレンツォの布施を貰つてをる乞食やいざりも物ほしそうな顔でなしに、いかにも有り難さうな顔。特にその中の盲人など眼は見えないながらに、喜びに溢れて心の底から有りがたがつて居る。アンジエリコの心には悪相や野卑な姿はどうしても見えなかつた、それ故筆にも表はし得なかつた。神に「恵まれた」人々の眼には乞食まで「恵まれた」有りがたさを表はして見えたに違ひない。ステファノの説教をきいてをる一群の婦人は地面に坐つて、やはりこの世界の人間であるが、その信順歸敬の風、法喜讃仰の顔は全く天人の様で、ステファノの説教の前には人は皆天人になり、婦人は盡く聖母に

似る様になつたかと思はれる。ステファノの説教とロレンツォの布施とはこの堂の十一幅の中で最もよくアンジエリコの特徴を表してをる。それからロレンツォの審問は色の美しい外に、人物の配合表情に富んでをる。その場で、ロレンツォの確信と勇氣との横顔は、その他では温和慈悲の相で表はれてをるに對して、特に面白味が深い。判官は少し溫和すぎるが、その他の人々の或は憐み、或は疑ひ、或は多少輕蔑を表したなど、ブランカッチ堂のリッピの畫に勝るとも決して劣りはしない。ルチサンス美術の淵源はブランカッチ堂の壁畫にあるといふが、又その元はこのアンジエリコにある。アンジエリコはベルジノやラファエルの先輩であるのみならず、全く師匠といつてよい。只ラファエルやその以下の人々になつては技倆は進んで、色や配合は出来る様になつても、アンジエリコの心持ち、即ち淨い信仰、素直な心を持たないから、その材料を古代の美術に仰ぎ、キリスト教の美術でないも

聖ロレンツォの座寶 (アンジエリコ筆)



のに轉じ、終にラファエル以後の墮落を來した。

二人の聖者の傳記の外、四方の隅にある諸聖者の像には、聖マルコの十字架の下の聖者が再びロマに現はれた趣がある。只トーマスのみが全く異なつて、且つ劣つた様に見えるのが解しかねる。

半日をアンジエリコの畫の中にくらし、一種の蘇生を得た。どこを見てもこれ見よがしの風をした畫や彫刻のみのロマにも、ワチカノ宮の一隅、小な堂の中にこの別世界がある。歸りはラファエルの畫のあたりに人の多い中を、人も畫も見ない様にして宿に歸つた。歸つてから朝の心持、畫の前に得た感じを書かうとすると、外には自動車家の中には電鈴の音、その中に街上で喧嘩の様な話し聲がやかましい。ロマの町はアンジエリコの神聖清淨な畫をおくべき處でないと思へる。

空はくもつてむし暑い、夕方をパラチノ (Palatino) の丘でくらす

うと思つて、四時前からその方に行つた。此處もやはり昔の榮華の跡。僅に方數町のこの丘一つが始めはイタリアの中心、それから地中海を庭の池としたロマ帝國の王宮の集まつた處。二千數百年前の石垣にロマの初の固めも残つて居れば、宏大な宮殿に帝王の住まつた跡もこの丘に集まつてをる。ロマ帝國の最初の皇帝で又その宗教の長であつたアウグストがその宮殿から、齋女の宮この間行つたフォロの中にある()に行くため高い大きな廻廊を作つた、その残りの跡を丘に上る。その下にフォロの廢墟が一目に集まり左にはカピトルの丘から古の城壁の残り、右にはコンスタンチンの凱旋門から大集會所のコロセオ。一望の世界は總てロマ帝國の歴史を物語る。昔は今のフォロの廢墟に議事堂、殿堂、政廳などが薨を並べた、その全體を見下すこの丘の上。その古の王朝以來ロマ人の本據であつたこの丘の上に、天をつく大宮殿を建て、帝王の威權に四方を睥睨した

跡も今はやはり廢墟。掘り出した分には厚い壁の倒れた残り、折れた柱のかけはし。何れもハドリアン別荘と眺めは違はぬが、こゝには種々の歴史變遷の跡がある。帝王の威力を示した傲奢、倨慢、その王位をねらつて權力の取り合ひをした隠謀、反間皆こゝに起つた。帝王の奢りを極めた宴會に人々が亂飲暴食して、踊り歌つて騒いだ跡。外から歸つて來る帝王を廻廊の曲り口に待ち受けて暗殺した處。滑稽、悲劇あらゆる人生の活劇を演じたのは此處で、その活劇で一時は殆ど世界の運命を支配したと思へば、この丘一つは世界中の最も不思議の場所である。その宮殿や何か壁や柱で地上に残つてをるのもあれば、穴倉の様に地の中にもぐつて見えるもあり、その下にまだいくら地の中に埋もつて居るか殆ど知り得ない。この下にも宮殿があるに違ひないと分かつて居る處でも、上は木立が茂つて、そこをあるけば只の丘の上としか思へない。その一端を現に掘

り出して居る處を見ると、帝政時代の煉瓦の壁の下には、共和時代の割石が出て來、その尙底には一層古い王政時代の角石で築き上げた跡が現はれる。壁一つにもローマの歴史全體を物語り、千餘年の變遷を示す。四年前にはアウグストの宮殿の横、ジュピター殿の拜壇に腰かけて、夕日の西に沈み、聖ピエトロの塔が夕日の空に聳えるのを見て、つくづく古今の變を思ふた。今日も同じ處に坐つて見ると、丁度聖ピエトロとこゝとの間に新に建つたユダヤ人の會堂が大に圓塔の眺めを害する。成住壞空、帝國時代の建物が壞はれ始めて、キリスト教の寺々が建ち始め、古の跡は土に埋もれて、四百餘の寺々が羅馬の飾りであつたのも過去になつて、今は又その寺々に競争すべきものが年々建つ。今日の下に見えるユダヤ人の會堂、その先きの大きな裁判所、それからどこに行つても目につく先王の紀念碑など、羅馬の人は此を二十世紀のローマの飾にしやうとして居る。此等が壞は

る時には又何物が代はるであらう。

アウグストの宮の隣に今まで僧院であつた家の庭に、シブレスや松の木立が茂り、その間に草が生ひ茂つて、こゝはまだ廢墟にならぬが、全くの住み荒らした様。此處も前に來た時にはまだ僧院であつて見物に這入る事は出来なかつた。それをイギリス人のミルスといふ人が買ひ取つたが、此頃イタリア政府に寄附して、此からその地面の下にあるテベリオの宮殿を發掘にかゝる處。此の家も木立も數年の後にはなくなつて、ローマの廢墟が地の平から出てくるであらう。住み荒れて、草が人の身の丈よりも高く、昔の庭のばらの花が草の間に亂れ咲いて、それも大半は雜草に蔽はれてをる。その間に坐りこんで、全く草の世界に這入つてしまふ。木立の中に鳥が時々鳴いて、人住まぬ家の壁にひびく。淋しいといふよりは、凄い様な静けさで、發掘してさらけ出した廢墟よりも餘程趣が深い。

それから又丘のつき出た方の曲馬場や御殿の跡に行く。こゝには壁も天井もまだ多く存して、その中に穴倉の様な暗い處や、又二階三階の見はらしの室など數限りなく並んで、うつかり中で迷ひ出せば出られなくなるかと思ふ。それ等の建物の屋根は一つの庭の様になつて、そこから東南を見はらす。カンパニアの景色は他と同じ様であるが、こゝからはカラカラ帝の大きな湯殿が一つの山の如くに見え、その先にアピア道 (Via Appia) がかすかに野の間を通つて、兩方の墳墓が蟻の塔の如く見える。ローマ人は實に奇妙に見えを好んだ人民で、カラカラの湯殿は特に東南からローマに這入つて來る者に見せるために、城門を入つた處の丘の上に尙一つ山の如き建物を造つたのである。又アピア通の墳墓もこゝからは蟻の塔の様に見えるが、傍に行つて見れば小なのでも日本の大きな家位はあり、大きなのは一つの城塞になる程である。活きて居る間には此のパラテノ

の御殿に住み、死んでも尙その墓を大きくして街道を通る人に見せたる。こゝにいふ我慢はローマ以來今の西洋人の氣性にも傳はつて居るが、日本にも大分傳染し始めた。この我慢が高じてローマは階級の争ひに苦んだ如く、西洋の文明は社會問題に苦んでをる。日本もそのまねをしない様にしたいが、今後どうなり行くか。

ローマ人の慢心を考へるといやになるが、然しその廢墟の屋上から夕暮れの野山の眺めは實によい。日も段々暗くなりかけるから、穴倉道をマッテでてらして漸く元の道に出、丘の麓に沿ふて行く。そこには最古の時代のロムルスが築いたといふ城壁が少し残つてその上に帝政時代の城壁が見上げる様に聳える。フォロの廢墟も夕暮の空に全體灰色に全るで焼け跡の如く見える。

貧民窟の邊には、労働者の家に歸るもの、道傍で酒を飲むもの、その傍にはだしの子供等が遊び、女等は道ばた會議をやつてをる。日の

暮れ頃に貧民窟を通るのは初は恐ろしい様に思つたが今はそれほどにない。その中に或る家の二階に頻に歌と音楽とがきこえる。寄席などに出る歌ひ女の稽古らしく、その前にハイカラの男が二人立つてその二階を見張つて居る。此は貧民窟での一つの奇観。

食後は王宮前からテルメの廣場 (Piazza delle Terme) に散歩した。朧月に時々雲がかゝつて、月のぐるりに虹を作る。パラテノの丘の上で木立と廢墟との間に此の月を眺めたらさぞ物凄からうと思つた。

五月十六日 聖ビエトロの塔上、システナ堂。

今日も朝から暑い。早くに聖ビエトロに行つてその塔に上つた。柱のぐるりを廻つたゆるやかな石段を何百段か上りつめると屋根に出る。下から見て小な人形の様に見える正面の石像がおぼけの

如く大きく、屋根の上には番人や石工の住家があつて泉もあれば窓には草花もある。屋根の上には一つの別世界。この有様を見て始めてパラテノ丘上の家が、屋根の上には家を建て重ねた古の様を想像し得る。石段を上つて圓塔の中に這入ると、圓形の廻廊から圓塔の下の堂内を見下ろす。下から見れば見上げるばかりの寶座が脚下に小さく見え、堂内の人の頭のみが見える。圓塔の内壁、丸天井は總て寄石細工の畫で、キリストや使徒が並んでゐる。此も大きくておぼけの様にある。又段を上つて第二の廻廊、堂内の人が尙小さく見える。尙一層上ると圓塔の一番上の丸天井の下で、第一の廻廊からおぼけの如く大きく見えた寄石の畫が通常の大きさに見え、堂内を全く眼下に見下す様はパリのエッフェル塔の中段位に當る。然しエッフェル塔からはおつ開いた眺めであるに反して、こゝからの眺めは一つの建物の中でこれだけの高さ。堂の大きさは下の床をあるいただけでは、

一向に感じないが、こういふ様に見下すと、いかにも大袈裟な建物。その上、この高く大きい圓塔が全く石で積み上げたもので、厚い石の壁で出来てをるには驚く。上段に上るためにこの圓塔の周圍の石壁の間に人の通れるだけの段を造つてあるのでもその壁の厚さを知るに足る。これだけの大きな塔を石で積み上げ、二三十間の高さの石の柱と壁とでそれを支へてある。その全體の重みがどれだけあるか、殆ど想像し得ぬ。この上段の廻廊から少し上つて、圓塔の最も上の廻廊に出て外を見はらす。ローマの町をあらゆる屋根や丘の上から見たが、この頂上からは全市を見下し、カンパニアの野も平くは見えないで、直にアルバニアやテボリの山に連つて、パノラマの山野を見る様にある。ワチカノの宮殿や庭園は目の下、ローマの全體は地圖の如く見える。

古はバラテノ丘上の宮殿から四方を見下して威光に誇つた帝王

が相次ぎ、世界帝國の首府であつたローマが、段々にキリスト教の首府になり、十五六世紀にはその威光の盛りを示してこの大堂を建て、世界の首府はこゝにあるぞと四方を睥睨した。その教會は今世俗の權力を失つて、政權は、直脚下に見えるキリナレの丘に移つた。然しローマ教會は今もなほ宗教上の威權を保つて、ワテカノの人々は終には全く世界をこの大圓塔の膝下に屈服する時が來ると信じてをる。今年の春から夏にかけて今の法王が得道の五十年紀念を祝ふために、數萬の順禮がこのピエトロの寺、ワテカノの宮殿を目ざして世界中から集まつて來た。外にはフランス政府から大打撃を受け、内には新思想の衝突で分裂があつても、ワテカノの人々はローマ教會の將來を望んで、この大圓塔が四方を見下して巍然として空に聳ゆる如くに、教會の勢力が天を突き世を蔽ふと信じてをる。この信仰は、古ユダヤ人がそのエルサレムの殿堂を世界の中心首府と信じた、

信仰と、ローマ人が世界を支配した得意さとが一つになつて、この教會に傳はつたものである。ユダヤ人の多數は四方に離散しながら尙將來にエルサレムの昌へるのを信じてをる様に、教會の人々は内外の多難も終には教會の勝利に歸すると考へてをる。常にこの大殿堂の傍に居つて、この圓塔を見上げ、又塔の上から四方を見下して十五六世紀の盛大な跡を仰ぐ人々がこの考へを持つのは無理でない。然しローマ教會の威勢がこの大圓塔の如く四方を睥睨するのは過去の事實であつたか、將來に現はれるか、我々には疑問。

ワテカノの庭には、花の園、木立の森、その間に宮殿の屋根、それからルールドの聖母堂を小さく寫した寺塔、丘の岬の天文臺。それが即ち今の法王の領地で、法王はこの庭園宮殿の外に足ぶみをしない。それ以外の廣い土地はイタリア王室の土地であるから、カーデナルはローマの市中では足で地を踏まない。世界の宗教上の君主といふ考

へは大きいと、それと同時にこの丘を唯一の領地として、その外に足踏みをしないといふ考へは小さい。この大と小との矛盾が色々な點で教會の活動に現はれる。理想は非常に大きくて、その實行に窮屈な點の多いのは、古い名家大家が昔の威勢に執着する時に現はれる現象である。

暑い日光にてりつけられて長い間四方の眺めを貪り、それから下に下り、システナ堂(Cappella Sistina)の畫を見に行つた。小くもない堂の天井と正面の壁一面を一手で作り上げて、天地創造と世界の最後の恐ろしい様に力のある畫で充たしたミカエル・アンジェロの腕は怪しいまでに驚くべきもの。仰いて見れば、空中に力そのものが人間の形に現はれた様な神が、その一呼吸に天地日月を造り出す。一指を振ふ勢に人間を造る勢は殆ど筆と彩色とで出来た畫と思へない。世界の最後に混沌たる暗の空にキリストが天上に現はれ、その

手を上げその腕を延ばせば、その勢で總ての人が復活して、善人は空を飛び上つて天に上り、悪人はつき落とされて地獄に下る。見る限りの空中は人間のからだで充滿して上下縦横に動く勢は、大嵐の雲が皆人間になつたかと思える。ミカエル、アンジエロ自身は世界の創造や最後のこの話しを事實と信じ、宗教の大切な教理と思つてこの畫を畫いたかも知れぬが、その作は話しや教理の説明でもなければ、信仰の現はれでもなく、只大きな力、恐ろしい勢を畫き出した。この畫を見ると、教會の教理でいふ神の創造力やキリストの審判よりも、却つてこの恐ろしい力を二つの手で畫き出した畫師の恐ろしい力に驚く。ハイデンは世界創造を音樂に作つて、その中に天使の讚美歌など大空に充滿する宏大な音律を示したが、その全體は天地創造の曙を美はしい春の晨の如く、洋々たる大空の光りの如く感せさせる。この天地創造には、さういふうららかな調子はなく、全く萬物創

造の力のみが見える。ワグネルは神々も人間も共に滅亡する世界の最後を戯曲に作つたが、その世界滅亡は悲壯の中に寂靜の趣きがある。ブリュンヒルデの最後の歌とラインの川水が上つて来る音樂とには、神も人も愛情の中に一つになつて涅槃虛無に入る調子が潜む。それに反してこの最後の審判は世界の最後でなく、只一つの大きな大回轉、大革命、大動亂を示し、此から先に何事が起つて来るか分からぬといふ感を與へる。アンジエロを始め今までの畫師は、世界の最後を畫いて此れから善と悪とが永久に分かれ、善人の天國は盡きない快樂、限りのない光明が続くといふ様に畫き出したが、ミカエルにはその様な結末といふ事は考へられなかつたらしい。どこまでも力、いつまでも運動の精神が充ちて、世界の最後といひながら最後の結末でないものを畫き出した。後代の畫師にはこのまねをしたものが多いが、形のまねだけでその精神と力とがない。ミカエ

ルアンジエロはこの點で前後に類のない、不思議な人物であつた。この恐ろしい畫の下、兩側の壁には、全く反對の美しい、色彩燦爛の畫がある。ベルジノやポテセリなどフレンツエの名工が集まつて、一方はモセスの一代、一方にはキリストの一代を畫いた。此等の畫の美しさは又格別で、男も女も優美な姿、衣紋も武器も色美はしく、人物の配合も背景の山水もしとやかにのどかである。總てが美しいがラフェエル以後の畫の様にけはくせす、十四世紀のうぶな風はなくなつて、巧に精工になつて居る。ミカエル・アンジエロと相對して、よくもこれほどの對照が世にあつたものと思ふ。

正午を過ぎてシステナ堂を出、ワテカノにデルツル氏に告別に行つた。今日も色々な人が出入する。ドイツの外交官が勳章をぶらさげて盛裝の軍人をつれてくる。そのあるき様が二人とも妙に足を前に踏みしめ、からだを前に曲げる様の兵式的な對して、高僧達

が黒赤の垂れた袍にゆるやかに、少しそり身になつて重みをつけて來るなど、暫く待つ間にも色々な光景が見られる。デルツル氏に會つて、色々を見せて貰つた禮をいひ、別れをつけて後宿に歸つた。

午後は夕暮前に大使館に行つて龜山氏に會ひ、新聞を見、それからジエスイトの本寺を見て歸つた。夕食にはテンビエリ氏を招いて共に食事。

食後テンビエリ氏が歸つて後、同宿のイギリス人が色々と話しを持ち出して、終には勞働問題になり、議論が盛になつて、別れて部屋に歸ると十二時近い。

五月十七日、テルメの中庭、聖ビエトロの大儀式。

今日は日曜で、毎日の通りの晴天。テルメの博物館(Museo delle Terme)に行つて、その中庭の木蔭に腰かけて、古の僧院の夏景色を楽しむ。

シプレヌの木々の間に泉が湧いて、その邊には紅白のばらの花が緑と映じ、風が吹いて泉の落ちる水が散ると共にばらの香りが馥郁として庭に充ちる。庭の中も四方の廻廊も古の石の彫刻。その間に静坐すれば全く古の世界に住む心地がする。然し四方の廻廊の上には近頃建てた高い家が聳え、その大きな家も貧民の住家となつて、窓には汚い洗濯物がぶら下る。又他の方には窓ばかり並んで兵營の様な大藏省の建物が見える。貧民の高殿に、數百萬圓かけた殺風景の役所、その中間にこのゆかしい庭、趣味の多い古代の石、妙な對照である。庭に出ては廻廊をあるき、彫刻を見たり花を見たりして時は知らぬ間に立つて正午を過ぎた。

午後は五時から聖ピエトロの大堂に大儀式があつて、その入場券を貰つた。フランスの婦人でマリー・マダレヌといふ尼さんが、革命の時から色々の事業を起し、終に一つの教育團體を造り上げた。そ

の人を表旌して *Beate* (恵まれた人といふので *Beate* 聖者の一段下の位を授ける儀式即ち *Beatification* が今日行はれる。その儀式の本分は午前に済むで、マリー・尼はベアタとなつてをるのを、午後に法王が參詣してそのベアタを禮拜する。法王の行幸といふので參詣の人は四五萬人にならうといふから、少し早くに寺に行く必要がある。テンピエリ氏の家に行つて、一緒に堂内に這入つたのは四時、一般の參詣は堂の正面から這入つてその廣い堂内に、已に一杯になつて立つてをる。こちらは特別席の入場券を持つて、横の口から這入る。赤黄黒の服を着たスイス衛兵や、燕尾服を着た世話方などに何度か入場券を示して、やつとで定め席に着いた。席は拜壇の直そばで法王の椅子から遠からぬ處、棧敷の如くなつた高い處で、そこにも黒服の男女僧俗が一杯。フランス人の坊さんで前の方に居た人がその席を譲つてくれた。そこに坐ると、拜壇から向ひの棧敷は盡く見

える。拜壇の前には二列に紅の絨氈かけた椅子が並び、その中央に白茶の錦で蔽ふた椅子が法王の玉座で拜壇に向つてある。向ひ棧敷に今日聖位を貰つたマリーの弟子の尼達、その家族などが第一のマリーの生まれた土地の司教が黒衣に紫紺の帯をさげて、うれしさうに得意さうにあちらこちらに行つて周旋したり話したりしてをる。玉座や兩側の椅子の邊にはスイス衛兵が長い劍を持つて立つて居る外に、法王廳の待従の様な人が芝居や歴史畫でのみ見た風で、黒の着服に細いツボンで、何か名があるが忘れた往來してをる。見上げると、堂の柱は紅色で金ぶちをとつたきれで飾り、拜壇から玉座の邊は一面にガラス玉で飾つた電燈のシャンデリエが連り、拜壇の奥、金の雲や天使の圍繞した一番奥の窓常には鳩が金の雲から出た畫の見えるにはベアタが天使の示現を受けてをる畫が奥深くかゝつて居

る。總ての光景が芝居以上の芝居で、よくも此れだけ飾りも飾つたと思へる。一時間待つ間にも此等の飾りや人々の往來、あたりの人の話して退屈もせず、時は五時に近く。法王廳に各國から來てをる外交官連中が現はれて席に着く。燃える様な朱袍、朱帽のカーデナルが一人二人出て來て、跪いて祈禱の後、嚴然と紅の椅子に着く。その中に電燈が段々にばあゝとついて、拜壇から堂内一面の燦爛。奥深いベアタの畫は特にこちらからは見えぬ電燈で照らされる。一つ電燈のつく度に人聲が堂内にひびく。その中に堂の入口の方に人が動搖し始めた。見ると左の方から人々の頭の群集を越えて法王の姿が遙か遠くに見え出した。そのしとやかな行列が段々堂の奥に進んでくる。法王は高い輿の上に椅子にかけ、右の手を軽くあげて群集の人々に Benediction(恵みを垂れる)しつゝ、近づくと法王の老顔も見え出す。その輿をかつぐ人の赤い着物、その兩側に

は金の冑を着た衛兵、その前後には黒衣の平僧に、ついて朱紺衣の
 プロトノタル(書記官)の一行がそろりと進んで来る。人々は頭
 を下げるもあれば、跪くもあり、皆手で胸に十字架をかいて法王を禮
 する。その行列が音楽と共に進んで終に自分等の棧敷の前に来て
 そこで輿を下ろし、法王は椅子から立つて、拜壇前の白茶の椅子に腰
 をかけてよりかゝり、拜壇に向つて拜禮する。朱と黒と朱紺と紅と
 金との人や飾りの中央に法王のみは眞白の袍に紅が、つた肩かけ
 をかけて神々しい姿。黙禱禮拜を終つて拜壇の前に進んで跪くと
 役僧が香爐をふる。その間オルガンに人の聲の歌。法王は元の座
 に歸り、腕をかけて拜壇に向ふ。拜壇の上でこの堂の役僧の長老が
 今日ベアタになつた尼の名を呼び上げ、その聖位に列した事をつけ
 る。それに次で歌はそのベアタの讚美。尙一度法王が拜壇に進ん
 で香の煙が上がり、元の座に還御あつて、それでベアタに對す法王の

敬禮が済む。そこでベアタの故郷の司教が進んで法王にベアタの
 一代記を書いた本を奉り、その團體の尼達を紹介し、尼達がベアタの
 遺物を籠に納めたのを法王に見せ、又大きな花束を上る。その籠は
 尼の本寺に持つて歸つて拜壇に祭るので、それを法王のお目にかげ
 るのは即ちその遺物の禮拜を許されたしになる。その外カ
 デナルや書記官には各その制服の色に製本したベアタの一代記を
 呈するなどの式をして、それで式は済む。音楽と共に法王は元の輿
 に乗り、行列は音楽につれて進み、法王は又手をあげてベチデクシヨ
 ンを參詣の人にしつゝ行く。參詣は皆跪く。法王の行列が遠くな
 り堂を出ると共に音楽も終つて、そこで一時に人聲ががや／＼と堂
 内に充滿する。何れ皆法王を見た喜びや、儀式の立派な事を話すの
 であらう。出て行かうとする人ど、拜壇に近づいて見物しやうとする
 人との入れちがひて中々の混雜。それを見てをると、後にこの間行

つた尼寺の尼さんが来て居て挨拶をした。「どうです、この儀式を御覧になつてどういふ感じがします。まるで天國が此處に下りて来た様でしやう。」といはれるから只如何にも壯大でしたと答へた。別れを告げると何れ又天國で御目にかゝりませう、天國で會へる様にあなたの爲めに祈禱を始終しませうといはれて別れた。此等の尼達始め信者には、この壯大儀式のが實に天國の面影で、法王は神の姿と見えるであらう。ゾラは此儀式の事を、いかにもいやな儀式、迷信のかたまりの様に書いて居るが、又一方では素直な信者が此の儀式に喜びを得る心根にも同情しなければならぬ。本願寺の大堂での儀式を今の世の學者は忌はしいものと見るであらう。又その中には喜捨を集めるとか見えを飾るとか忌はしき事もあらう。然しそいふ忌はしい方ばかりでなく、加賀邊の信者がその信仰の法王に歸敬する心には同情すべきものもある。この今日の儀式でも、ゾ

ラは只強欲の金集め政略の様に悪しざまに書いてをるが、その書き方には偽りもある。その上此が金集めの爲めとしても同時に身を宗教に委ねて慈善や教育に大きな仕事をし、その信心と事業とが人々の模範になつた人を旌表して、神の恵みはそいふ人の上に下るといふ教へを形のある儀式で表はすのは人間世界の美舉である。法王の尊を以てこの一人の尼の靈位を禮するといふ儀式を行ふのは、日本で陛下が靖國神社に行幸あると同じである。人々の群集を分けて、やつと堂の正面を出ると、堂の前の廣い敷石からその先の町々まで全く人間の波。テンピエリ氏の家に行つて暫く休んでから歸り路に就いたが、馬車も電車もあつたものでない。西に傾いた日の光りを横にうけ暑い中をとう／＼宿まであるいて歸つた。

夕食の後にゴードのお母さんを訪問したが、今度は會へた。アッシ

シの話しや、此からの旅行や、又ゴード氏も事によつたらロマに来る、再會を喜ぶであらう、手紙毎にあなたの事を書いて、アッシンで遇然に遇つたのを非常に喜んで居るなど、話しは十年の知己の如くに感せられる。ゴード氏の書いた戯曲を一冊貰つて歸つた。

五月十八日、荷造り、告別。

朝は荷造り、いつも荷を解いたり、納めたり、何度同じ事をするか。人間が財産を持つて、それを色々になぶつて處置して、死ぬ時には残して行くのも此と同じである。

午後はミス・ダグの處に行つて別れをつげだ。レンドラム夫婦も居合はせて暫く話しをして、それからアントニオの寺に行つた。此間その法弟のリハルドといふのが来て、足の型をとつ行つて、フランスカン僧の靴を造つてくれた、それを貰ひに行つた。他の法弟

等も出て来て、その靴を試みるのを見て、序手に此の法衣や繩の帶も造りましやうか、「一そうフランスカンになつて、僕等の仲間に這入りませぬかな」といふ、フランスカンの人等の始終快調なるには感服する。聖者の氣象が今日まで残つて居る。此等の僧の間に居ると、丁度日本で禪僧の間に居る心地がする。それから法弟等は各自分の故郷はどこで、その寺に何といふ教父が居る、そこへ行つたら是非寺に行つてくれなどいつて、澤山寺々の處書きをくれた。靴代をとらぬといふから、寺に布施の料をおいて、皆に別れをつげて宿に歸つた。

夕食には龜山氏とコスタ氏とを招いて一緒に食事。三人で音楽の話し、食後大通のカフェに行つて十一時すぎまで外がはの涼い處で三人話しをし、共に別れを告げて別れた。此がロマでの最後の晩。

附 記

このロマ日記の中に二三度も法王不外出の事をかいたが、その後大變化が生じて、法王の玉車がワテカノ以外に出るに至つた。今年一月南イタリアの地震について法王ピオ十世は非常の感動を得られ、震災地へ巡幸とまで云はれたが、老體の遠遊も出來ず、ロマにある病院に不幸の罹災者を訪問せられた。是れ實に教會にとつては非常の出來事で、四十年以來「ワテカノの四人」が始めて王朝の治下にあるロマの地を踏まれた初めである。此によつて法王朝と政府との間柄の改善する端を開き得るや、固より疑問であるが、少くともワテカノには偏狭の人ばかりでない事を證した。此が法王と人民との一層に親近する端ともなれば、イタリア人民と教會とにとつて幸福の事件であらう。

(四十二年四月記す)

ロマからエチチアへ

五月十九日、ロマを去つて汽車の旅。

今日はロマを去つてこのラゼンナに着いた。

正午すぎ汽車でロマを去る。永遠の都も終には去らざるを得ない。町を離れてカンパニアの廣野に出る。照りつけた日光が草の緑と花の深紅とに映じて、野も山も全く夏景色。五月でさへ随分暑いが、六月にこのカンパニアの暑さが思ひやられる。フォリニオまでは半月前に通つた路。木立が總て茂みを増して、萌黄であつた樺やポプラの葉は深緑になつてをる。

フォリニオに近いて、スバシオの山が見える。アッシシの町は見えないが、その隣りのスペロの町が山の上に城の如く見える。フォリニオから新しい路で、汽車は段々山を上り谷川に沿ふて走る。涼風が山

から吹きおろして、全くロマの暑さを忘れ、蘇生の心持ちがした。ノセラ(Noera)といふ處でその山から出る天然鑛泉を買つてをる。暑さを忘れた上にオンブリアの清い水に喉をうるほして、心地が清し、ロマの事を考へると、一層深くその暑くるしさを感ずる。山又山の間をすぎる。草原はしとねの様に美しく、柏の木の初緑が滴る様に涼しげに見える。ファブリアノ(Fabriano)といふ處を通つたが、山と山との間に一構への城の町で、四方の山野が延びくゞて空気の清く景色のよい所。そこでイギリス人の婦人二人が下りて茶を飲んで汽車にのり後れてしまつた、氣の毒ではあるが助け様もない。一寸汽車を止めればよいに、イタリアの規則づくめで一向そんな親切はない。その癖時間は正確でなく、汽車は常に不規則なのに、一寸動き出した列車を止めるだけの面倒をしない。なまけものが規則づくめでしばられる結果である。

ファブリアノの邊から桑の木が多くなつて、山の麓一面に桑が緑に、その間に紅の馬ごやしが燃える如く咲く。段々野が開け、汽車は山を下つて六時半に海岸のファルコナラ(Falconara)に出た。こゝで汽車の乗り換え。夕方の空が少し曇つて海の面は一面に赤紫に鏡の如く、水平の先きは雲か霞か、海と天との別もなく同じ色にどんよりしてをる。その静かな海面の處々に帆を垂れた船が動きもしない様に浮く。印度洋の夏景色を思ひ出して、歸り路の航海の愉快を今から考へる。汽車は海岸に沿ふて走る。後にはアンコナ港が静かな海面に浮んだ如く、行く先には夕やけが雲と水とに紅を染める。同車した老人が頻りに話しかける。ロシアとの戦争だとか、それから支那とは戦争しないかとか、君のお父さんは生きて居るか、何をして居た、まるで警察の訊問の様な事を並べる。それから又日本の氣候はどうか、桑畑は多いか、葡萄酒、米などに關税をいくら取るか、米

はどれだけ出来るかなど、うるさいが、よさそうな老人であるから答へすると、頻りに日本はえらいといふ。日も大分くれて暗くなつた頃にペサロ(Pesaro)といふ所に着いた。老人は、こゝは音楽者のロシニ(Rossini)の生まれた處、わしは此處で下りる、さよなら御機嫌ようといつて去つた。それで濟んだと思ふと、先から老人との話しをきいて居た若い男が又始めた。その間に全く暗くなり、外には螢が飛んで、蛙が鳴く。螢を見て去年の箱根行きを思ひ出して、箱根へ行きたくなつた。

リミニ(Rimini)といふ處で尙一度乗り換へ、一時間ばかり待つ。その間に諸方にはがきを出す。このリミニは、ダンテの詩で名高くなつた、バオロとフランツエスカとの悲劇のあつた處。今は海水浴場が出来て夏は賑ふといふ。

ラヴェンナ行きの汽車は又暗の中を走る。先きの若い男も同車で

暫く話しをしたがその中に二人とも寝入つてしまつた。目がさめるとラヴェンナに着いてをる。ステーションを出て見ると、バイロンといふ宿の馬車が一つ来てをるばかり、他の宿は満員で馬車を出さない。その上バイロンのも前から約束の客を迎へに來たので、その人が來なければ一室はあるといふ。その客が來るか來ないか、待つ間ステーションの前で立つて居る。時は十一時半で夜風が涼しく、緑の木立にガス燈が映じてうつくしい。若しその待ち合はせの客が來てバイロンにも部屋がなければ、今夜はステーション前のベンチにかけてねると定めて、暫く待つたが、その人が來ないので、やつと馬車にのせて貰ひ、静かな町を通つて宿に着いた。

ロヤで宿のなかつた時は日中ではあり、どうなりと出來やうと思つて平氣で居た。その時考へて、若し此が夜おそくであつたら少しは困つたに違ひないと思つた。ところが今日はその困つた場合に

遭遇した。それでも野宿すりやよいと決心してからは又平氣で、少しも困つたと思はなかつた。こゝういふ心持ちになり得るのは實にフランシスのお蔭である。然しこれが冬の寒い時であつたらどうか、又一ついつか試めす時があらう。

宿は古の宮殿で、二階の大きな縁側に沿ふた立派な室に案内してくれた。野宿すべきものが御殿で寝る様になつて、一層立派に見える。縁側に立つて見ると、ガス燈に青葉が美しく、夜は静で、隣りのフランツェスコの寺の鐘が時々時を告げる外何の音もない。

五月二十日。ラゼーナの寺々、フェルララ。

朝おきて、涼しい風が木々の間に吹いて心地よい。庭に出した机で茶を飲む。ロマとは全く別世界。

直隣りのフランツェスコの寺に行き、その隣のダントの墓に行つた。

番人が居ないで、中には這入らずに外だけ見た。それだけでもこの大詩人の遺骸がこゝに今もあると思へば、奥ゆかしく貴い。それから堂母では四世紀頃の石彫や、ビザンテンの寄石細工などある。その石彫には信仰とか不滅とかいふ事を動物で表はしてをる。その頃のビザンテン彫刻には動物の表象が多く、南フランスでもイタリヤでも四福音記者を天使と動物とで表はしたのを多く見たが、こゝには羊が献身、孔雀、駄鳥(?)が不滅、鹿が傳道、鳩が精靈、アナトラ(?)鳥が信仰、魚がキリストを表はしてをる。どうしてこゝうなつたかまだ知らない。堂外に八角の洗禮堂があるが、ラテラノの洗禮堂と同じく洗禮堂の最も古いもので、天井と壁との寄石細工は中々面白く、頂上がキリストの洗禮、それから下に色々の聖者など、例の大きな目の幼稚な畫風を美しく石で造り上げてをる。

次は聖ビタル(S. Vitale)の堂。此も八角形で、その拜壇は八角以外

につき出て、その天井も壁も同じく寄石。この寄石はモセスの一代記やマキシミアン帝の行列などあつて、風景もあれば人物も複雑である。堂の傍にブラチデア (Placidia) といふ五世紀の皇后の墓が此も小な堂の中一面の寄石。青色の中に星の光りの天井、壁には羊を飼つて居るキリストや、ロレンツォが四福音書を保管して、他の異端の書物を焼く所など、堂のくらがりの中に寄石が光つて美しい。今日の見物は千四五百年前の世界に歸つて、ビザンチンの寄石ばかりを見る。

聖ジョヴァンニ (S. Giovanni) の寺に行く路、他の寺にも這入つたが、何でもない。只古い家の淋しい町を通つて、ダンテもこの邊をあるいて居た、らうと思ふと、二十世紀の世界を離れた心地がする。暑い日の光にてりつけられて後、ジョヴァンニの堂に這入る。俄に冷りとす。堂の中にジョットーが四福音記者を天井に書いておいたのがあ

る。後の人が手入れをしていやに色をつけはしたが、その配合案配にジョットーの風は十分見られる。ジョットーは一方には活動のある戯曲風の畫に長けて居るが、又こゝういふ天井などの裝飾には建築家の技倆を表はす。寄石を多く見て後にこの風の裝飾を見ると、ジョットーの畫がビザンチン美術から脱化した跡が明かに見える。この寺の横にある元の僧院は病院になり、その前の廣場にはダンテが甲を着けて、死にかける兵隊に月桂冠を戴かせる記念碑がある。世の變化につれてダンテも軍隊の爲に盡す様になつた。

少し城壁の外に出て見たが、桑畑ばかりで眺めも何もない。町に戻つてテオドロコ帝の宮殿の正面だけあはれに残つて居るのを見、それから聖アポリナリ (S. Apollinari) の寺の壁には寄石細工でその宮殿の盛時を畫いたのがある。九百年ばかり前、このラエーナが海の側であつた時、テオドロコはこゝに宮殿を建て、その威光を振つた。

その宮殿は廢墟になつて、その面影を寺の壁に残す。この宮殿の畫に列んで、柱の上になつた壁一面は寄石細工のみで、一方はキリストに聖者の行列、一方は聖母に童女の行列、その上段にはキリストの一代記。五世紀のよりも技倆が進んで、大分畫になりかけて居るが然し寄石のうぶな作り方、幼稚な畫風に特別の趣がある。寄石の面白味は日本ではとても想像に及ばぬ。古の羅馬人の奢侈がキリスト教に移つて、この忍耐を要する技術の發達したのは不思議な移り變はりである。

宿に歸つて中食する。宮殿風の部屋に歸つて庭を眺めつゝ、日記をかく。その中に汽車の時間が来て、昨夜は夜風に吹かれて来た同じ道を暑い日中に通る。それでも木立の蔭は涼しさうに、そこに晝寢の人間もある。三時に汽車は北に向つて出る。直路ばたにテオドリコ帝の墓が小な城廓の様な形で立つて居る。汽車の行く四方

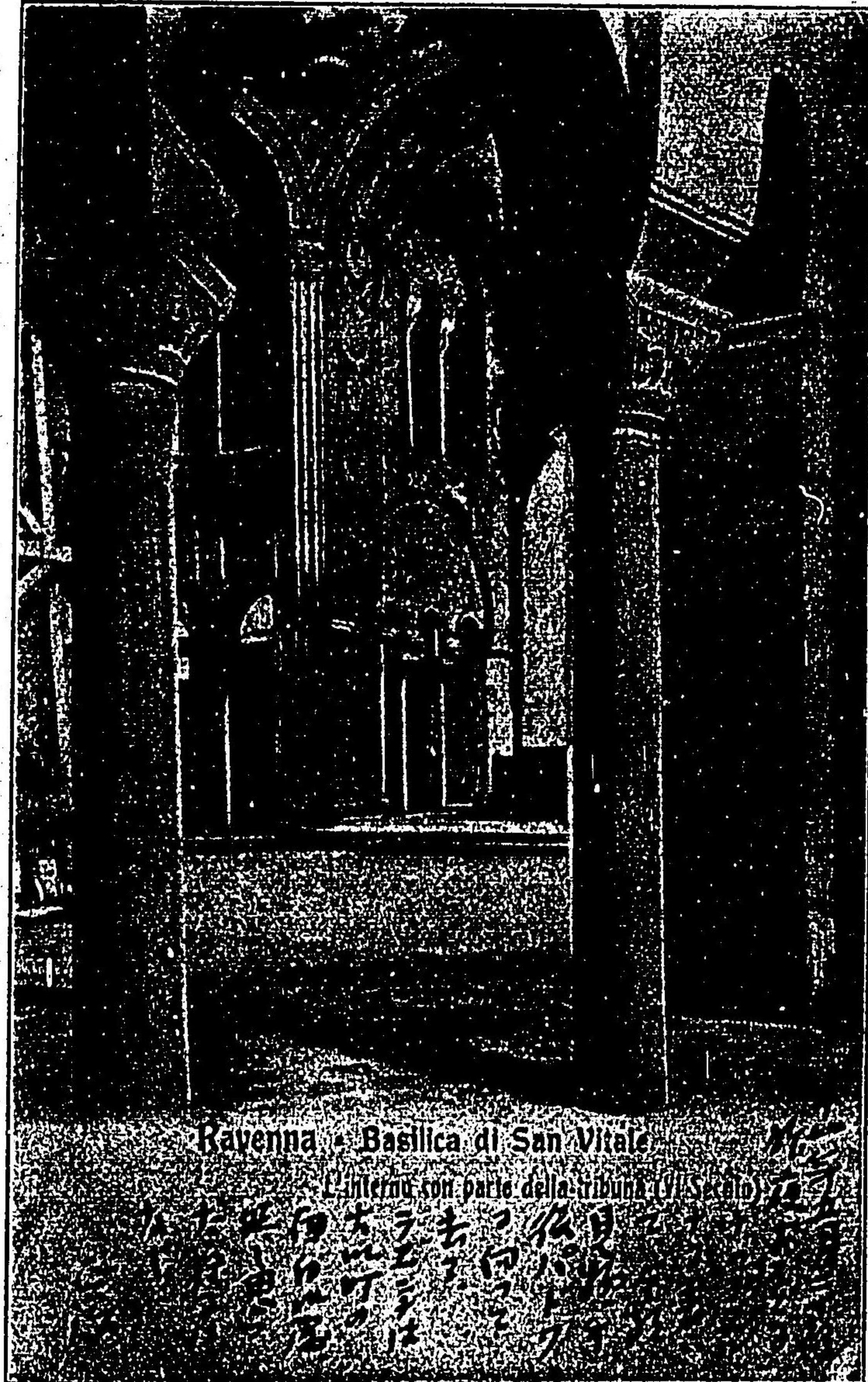
は全くの平野で、葡萄蔓のかゝつたポプラの木、畑の間の桑の木、その間には麥畑、麻畑、世は一面の緑に日が強く照つて麻の葉が特に美しい。この平野はレノやポーの河の砂で出来て、イタリア第一の大きな又豊沃の野である。同車の人の話しでは、去年は小作人のストライキがあつて此邊の野一面全く雜草の原になつて居たとの事。今年もバルマ邊で同じ様な騒動を始めて居る。ストライキは工業から農業にまで移り出した。

六時にフェルララ(Ferrara)に着く。一時間半の待ち合はせであるから市中見物に出かけた。公園の緑の木を越して四つ櫓が見える。四方に堀を作つた一櫓の城で、此は即ち一時このフェルララの大名で威力を振つたエステ(Este)家の居城である。城の中には色々の悲劇の跡があるとの事。どこの國でも大名の城には必ず殺戮の悲劇がある。城から遠くない處にはこの町の堂母。三角を三つよせた様

な妙な正面にロマチスクの彫刻がある。堂の中は全くルチサンス作りで、彫刻もルチサンスの末の寫實風に美しい。堂の前で休んで市中の賑ひを見、又堂を見る。通行の人には上り髯のハイカラもあるが、妙な建物の堂の正面や、その通りの家には七八百年前の面影がそのまゝで、エステ家の盛時の此の町を偲ばしめる。

ステーション前に歸つて、うどんを夕食にして汽車を待つ。少しおくれ、八時前に汽車は又北に向ふ。間もなくポーの河の廣々としたのを渡る。この河を南に渡つてから一ヶ月餘で又北に渡る。河水に夕日の光が紅に映つて今日の暑かつた一日もくれた。尙平野を北に走る。小山の麓にあるモンセリセ(Monselice)の町にガス燈がきら／＼して、山は黒い影に見える。そこで汽車に破損があつて又おくれ、バドワに着いたのは十時近く。宿の前の廣場には野天に机を出して酒やカフエを飲んで涼みの人が多い。

ラヴェンナの聖ビタルン寺(ロマチスク建築の好例)



Ravenna - Basilica di San Vitale
interno con parte della tribuna (V. S. Raino)

(四〇四頁参照)

五月廿一日午前。アントニオの寺、アレナの聖母寺。

午前はパドワで寺々を見てあるいた。昨日見た場から先に行く。その町々は廻廊造りの通路でポロニヤと同じ事。その南に出て競馬場の公園がある。その一方の御殿作りの家は古の競馬審判所。表にジオットとダンテとの像があつて、畫聖と詩人とが競馬の番人になつて嘸迷惑であらうと思へる。その反対の方は聖ジュステナ (St. Justina) の寺、正面は瓦ばかり積み上げた殺風景、中は大理石に柱。晨朝の静けさに白石づくめの寺の中に獨り坐るのも中々心地がよい。狭い路を辿つて少し行くと、廣場が開けて聖アントニオ (St. Antonio) の寺が高く聳え圓塔がいくつもつくくと重なつて立つ。壁はゴシックで塔はアラビア風。その大きなのと高いのとで、妙な配合も仰いで見ると、莊嚴ではないが宏大な感を與へる。中に這入つ

て下から見る。圓塔の裏側が九天井になつて、天に丸い穴のあいた様に見える。古はこの九天井から壁一面に壁畫があつて金碧燦爛であつたのを一度白く塗つてしまつた。それをはがして古の畫の跡を出して新しく色をつけてをる。

このアントニオの寺といふのは、フランシスの弟子のアントニオのために出來た寺。アントニオは生きてゐる間に奇蹟を色々表はして人から活き神の様に拜まれた。その墓に寺を立て、今日までも順禮が澤山参り、又アントニオが赤ん坊のキリストを抱いてをる像はどここの寺にもあつて、人が色々の事を祈願する。その棺は堂の横の御堂にあつて、澤山燈明をつけ、赤い袍を着た僧が勤行をして、その前に澤山人が參詣してをる。何れ皆各々何か勝手な事を祈願して居るのであらう。

アントニオの墓と對して横の御堂には、エロナの繪師のアンテキ

エロ(Antichiero)がキリストの十字架三幅對を正面に、横には聖ジャコモの一代を畫いた。このアンテキエロはアンジエリコと殆ど同時代の人であるが、その作を見るのは此處で始めて。ジオット、の後のロレンツエテの畫風があつて、高尚に奥ゆかしい書きぶり。色はアンジエリコほどに美しくはないが、一體にジオットよりは柔かな色合で實によい。メデルの聖者の顔もアンジエリコにあるマルチニの聖者の様で優雅の中に力がある。惜いかな他に作が多く残らないで人が多く知らない。

本堂の拜壇には名高いドナテロの聖母と四聖、その下には天使の子供姿が銅の浮彫である。聖母の像は何か古の型によつたらしいが、アントニオの花を持つたやさしい姿、フランシスの十字架を持つて身をそれに捧げた姿、力はないが美しい。フランシスの顔も大慈悲の聖者でなく、信敬感涙の信者である。總てドナテロの作はや

さしく美しく、曲線が優美なので、人が好む。日本でいふと鎌倉時代の彫刻に當らう。

本堂の後の小御堂には近代の畫があり、アントニオの棺の後にはその一代記を石に浮彫にしたのがある。

寺を出て尙正面を仰ぎ又横から塔のつく／＼立つのを見る。アントニオを信心してこゝに来る多くの順禮はこの妙な堂を見て、どういふ感じを持つか、きゝたい。堂の前にドナテロの作でエチチアの大將の乗馬像がある。ロマのカピトルにある乗馬像に似て、後世の模範になつたもの。ゆたかに馬に跨つた大將軍の風姿、その線の落ちつき、共にドナテロの名を上げるに足る。此を見て日本の楠公像を思ふと、いやになる。然し此の様な手本のあるイタリアでも近代至る所に建てた先王の像に一つとしてゐるくな作のない事を思へば、恥は日本ばかりでない。

寺の直そばに古の寺院學校を博物館にしたのがあつて、ロマ時代の石碑や古い棺や石の彫刻、それからパドワに關係のある畫師の作がある。

午後はアレナの聖母(Madonna dell' Arena)といふ寺にジオットの畫を見に行つた。古ロマ時代の石段棧敷の片われが残つて居る、その中に小な寺がある。外から見れば何でもないので、この小な寺にジオットの名作が壁に残つて、パドワの名物になつてをる。畫はキリスト一代記で、かき方はアシシのと同じく、中には殆ど同じものゝ寫しの様なものもある。然しこゝのはあかり工合がよくて見易く、又趣向の違つたのもあつて面白い。人物を配合して、その姿勢の様々に活動を示し、その顔つきに活きた表情のあり／＼する様、それから清い色が美しく、而かも少しもいやみなく調和した工合、ジオットは見るに従つてうま味が増す。その中でキリストが辱めを受ける景は寫眞で見た

時には、キリストがいかに困つた顔つきである様に思つて、疑つて居たが、本物を見れば中々そうでない。聖マルコの壁畫にアンジェリコの畫いた程に威儀堂々たる忍受のキリストではないが、他の畫師のと違つて、苦悶でなく、忍受不撓の風が顔にも姿にも十分見える。その外ラザロの復活の場で人々の表情、昇天のキリストの天をさして上る漂渺の姿、最後裁判のキリストの威嚴、一々筆では書けない。三時間は知らない中に畫の前ですぎて、閉館の時になつた。その隣のエレミタニの寺にマンテニアの畫を一寸のぞいた。マンテニアの得意の滋味と案配とは立派であるが、色がジオットに如く清くない。ジオットを見た眼を餘り他に散らさない様に大體見たゞけて出て宿に歸つた。

六時に汽車はバドワを出て、ポーの平野を直線に北に向ふ。

イタリアの別れ、エチチアの一日

五月二十一日夕。エチチアの到着。

長い間夢の世界の様に想像して居たエチチアに来て、夢が實になつた。實にはなつたがやはり夢に似た世界で、この世ながら、龍宮城に入つた心地がする。

バドワを出てから西に傾く夕日が窓からさし込むで暑いこと、呼吸も苦しい様に覺える。今夜はエチチアに行けると思つて忍耐する。メストレ(Mestre)で汽車は暫く止る。こゝから少し行くと、海で、エチチアはその海向ひ。海の中の町、宮殿の建て連つた水路、ゴンドラ船頭の歌のさける處。詩で讀み、畫で見て色々に想像して居たエチチアも、もう十分か二十分の間近づいた。この待ち設けの五分十分の長さ。

汽車は動き出した。畑が水田になる。行く手に海岸の堤らしいものが見え出す。海に出ては水の上に浮ぶ町が遙に見え、その水面にはターナーの畫で見なれた構色の帆が澤山に浮ぶ。水ぎはの家々の窓が見え出す。汽車はステーションに着く。荷物を持たせ、ホテルの番頭にいひつけ、直ぐ前の大河端に待つて居るゴンドラに乗る。汽車を出て、ゴンドラの地を踏むのでなくて、水に浮ぶ。眞黒に塗つて、黒い房を垂れたゴンドラの先に突き出た尖端だけは磨いた鐵の色白く、きらりと水にうつる。馬車ががた／＼敷石道を走るのでなく、只櫂の音のみして、舟は水を切つて静かに進む。河風は涼しく、夕日の名残りに水上の宮殿が、紅色水色、さまざまに水に映る。一瞬の間に汽車から舟の別世界になつてしまつた。大河から横に這入ると、舟がやつとすれ違へる位の水路で、その両側には、門口の石段で直に水に下りる家々が聳える。その間をたどつて、船

頭は曲り手毎に牛の唸る様な聲の合圖をして櫂を推す。貴族の家らしい所には、門口に家の定紋をつけた色塗りの柱が水中に並んで、その間に船をつけ、それから石段を上る様になつてをる。家の前、堀の間、狭い川を出て又暫くは大河。その両側の家々は皆名ある古の貴族の家。白い着物に淺黄の帯の様なものをだらりと下げた船頭に漕がせて行く船がある。それを指して、船頭は、あれは家々の持ち船で、乗つてをるのは何々伯爵夫人だと教へる。少し先には大川を渡して屋根のあるリアルト(Rialto)の石橋が見える。宮殿の窓には色々の窓かけの色が、壁の色と一緒に水に映じて、各々配合に面白味がある。大川から又小川に這入る。又大川に出ると目ざす宿はその川ふちで、船頭の妙な聲に應じて、ボイが赤緞子をさせた踏み板を石段から舟に渡す。それを上つて、水から直に宿の座敷に這入る。どうしても陸に上つたと思へない、水中の龍宮の御殿に這入つた心

持である。

部屋を定めて、直に湯を命じ、風呂場に行く。白色の焼物ばかりで張りつめた湯殿で、ロマ以来の垢と塵とを洗ひおとした心持ちは何とも云へぬ。

湯から上つて食事に行く。食堂には客は皆黒の正装をしてをる。外面は大分暗くなつて往來の舟のあかりがきら／＼動く。食後石でしきつめた縁側に出て見る。その下は床すれ／＼に水がちやぶり／＼して、時々ゴンドラがその石段に着いたり出たりする。ゴンドラの形は又妙で、前後共に上つて、その尖頭には鳥の頭の様でもあれば、剣にも似、鋸にも似た鐵の金器がつゝ立つて、その尖つた鐵が暗にも白く光り、ふわり／＼と上り下りして水の上を行く。水面には一面にあかりが往來し、遙か先きは紅緑の提燈をつけた遊船に歌ふ聲がきこえる。涼しいソプラノと強いテノレとの合唱の節々が水

を亘つて遙かさきの世界の音楽をさく心地がする。總てが此の世界のもの、様でない。川端の宮、ゴンドラの姿、水上の歌、芝居や畫で見て想像して居た光景が、皆目の前に實になつて、而かもそれが實世界のものと思へない。夢でない夢、現でない現だ。こんな處がどうしてこの世界にあるかと思へる。

見とれて茫然と水の上を眺めて居たが、一つエチチアの地を踏むで、その中心のサンマルコの廣場の夜景を見やうと思つて、宿の後の戸を出る。此處には敷石道の町がある。狭い町に色々の繪やガラエ、細工や珊瑚の店が連る間を通りぬけると、サンマルコの廣場 (Piazza San Marco)。大きな廣場の三面は白石の宮殿風の廻廊が夜目にもしる／＼見渡す限り連つて、その先にはサンマルコの寺がガス燈の光りに金色に見える。此處も亦別の世界。敷石の上には砂も塵もなく、そこらをおあるいたり立ち止つたりしてをる人には、いそいである

く人もなく、用事のありさうな風もなく、又どこの町にもある馬車の影もない。不思議な所といふ外ない。

寺の前から海岸に出る。古のドジエ(Dogge)の町の大統領の御殿がガスあかりに青白く、づらりと並んだ柱の行列が層々重なった上には、城の様な重い建物が夜目にもいちらるしい。海岸に音楽隊の演奏があり、椅子にかけてをる人、ぶらぶらする人が敷石の上一杯。通りには處々に弓形に高く上つた橋で川を渡る。その橋の白大理石の欄干に恁つて涼みながらに音楽をきく人も多い。芝居で龍宮の公園といふ場をしたら、かういふ風の書き割をする外はないと思ふ。

歸り路には又サンマルコの寺の横を通る。その高い壁のくぼみにかすかな照明がある。聖母の畫像でもあるのであらう。同じく海に近い龍宮城の様な處ではあるが、嚴島の拜殿にかすかな照明を

見れば、その奥の奥に何か不思議の底のある様に思へる。この聖母の照明はかすかでも周圍と共に現在の喜びを表はす様に見える。宿に歸つて再び縁側に立つ。水上の景、船の歌、夜はふけても同じ事。どうしてもエチチアの人民は遊樂の民、場所は遊樂の地。五六

百年前にこの町が一つの貴族共和政治の有力な國を造つて、地中海の四方に商業、兵略の手を擴げ、植民地、征服地の富をこゝに集めて造り上げたのが、この水中の龍宮町。征服した人民を奴隸に使つて、貴族の宮殿を建て、寺や塔を造り、又遊散にも用事にも贅澤な船を奴隸に漕がせた。只現世の快樂を追ひ、その日その日の奢りを極め、一日でもその日の興へる快樂を十分に樂まなければならぬといふ様に暮らしたのが、この地の貴族平民の生活であつた。その風が今に残つて、古の貴族には零落したのもあり、その宮殿の柱は傾いても、ゴンドラには古のまゝ、黒い櫂に金色の飾りをつけて、陸にも水にも

歌の聲。夕方になれば全市が殆ど海岸か舟の上で遊ぶ。この夢の様な詩か畫にのみ見られる様な龍宮城も元はやはり人間の利欲争鬭の結果で出来、今日も遊樂傲奢の衝になつてをる。

同じく傲りの結果ではあるが、清盛の作り上げた嚴島には全く別の趣がある。山の麓、水のきはに百八間の廻廊を連ねて、低い屋根の拜壇、本宮。見れば宮殿全體が水に浮いた様な經營には寂靜の趣がある。海中に石の宮を建て、階段も床も石で敷きつめ、高い甍を並べ飾りの多い窓から水を見下す、このエチチアの趣味には、執着倨慢の跡が見える。こゝは、人間現世の快樂をどうしたら思ふ存分出来るかとあせつた跡。嚴島は浮世の權勢を飽くまで得た人が、少しでも現世以上の理想に近づかうとした結果。

五月二十二日。エチチア派の繪畫、テチアノ、聖マール

この寺、リドの海岸、海上の夕暮れ。

朝飯後、舟に乗つて大川をアカデミアに行つた。その畫廊はエチチアに昌へた一派の畫を集めて十七世紀初の美術の粹を示す。

先づこのエチチア派の最大の畫師テチアノ (Tichiano) の聖母昇天を見る。上には綠袍紅衣の聖母が飄然雲に乗つて天に上り、天使がその邊を圍繞する。下にはこの奇跡を見て驚く人々。天空と地上との對照、美しい色々の配合、雲の和らかさ、衣類のひだの美事さ。いかにもエチチア派の最大の作家の筆の跡。テチアノが多くの人に好かれるのも無理でない。然しよく見ると不満足の點が段々出て来る。第一天に昇つて行く聖母は、腰を曲げ、からだに矯態を作つて、どうしても天空に上る神人でなく、地上に舞ふ人である。その兩腕を胸にあて、信敬感謝の風はしてをるが、その顔は只驚いたばかり。アンジエリコの聖母の神々しさは固より微塵もなく、ムリロの受胎聖

母の信順の情も見えない。十七世紀にしても、今にしてもこのエチチアで名高い美人があつて、その人が突然ふわりと雲に乗せられ天に上り始めた時には、丁度この顔この姿をするかと思はれる。天に上るのは結構だが、地上の快樂にまだ未練があつて、驚きもすれば疑ひもする。テチアノは聖母を畫いたのでなく、只聖母昇天の話にエチチアの美人をあてはめて、美しい色と可愛い天使や彩雲にその美人畫を作りあげたのである。

次にはパオロ・ヴェロネーゼ (Paolo Veronese) の此も最大の作、キリストの晩餐。大理石の柱の間、宮殿の廊下に机を並べて、光輪のあるキリストがその最中に坐つては居るが、その周圍は總て當時のエチチアの貴族。緋の衣のカーデナルや、肥つた貴族の殿様や、せた軍人、その間には黒奴のポイも居れば、犬も御馳走にあづかる。柱の間の見はらしは全くエチチアの風光で、キリストの背後の空には夕日がはな

やかな光りを空に残す。當時のエチチア貴族の晩餐會の光景その儘で、宮殿の作りから、來客の服装、背景の空台や建物から、机上の御馳走、杯盤まで、色は美しく、配合は巧みである。大きな壁一面のこの畫を、次の室から戸口を通じて見れば、殆どパノラマである。眞中にキリストは居るが、それは只中心をとるための一つの姿で、そこに誰が居ても差支ない。つまり一つの風俗畫に當時の貴族等の肖像を加へたものと見ればよい。こゝに招待をうけて奢つた御馳走にあづかるキリストは如何にも迷惑したであらうと思へる。

その外テチアノの門人や、同時代の人の畫が澤山ある。その中にはキリストの死ぬ所や、聖母の告示や、聖母の戴冠など、宗教の話しを題目にしたのが澤山ある。然しそれ等は何れも信仰を畫くために畫いたのでなく、只美しい畫、貴族の趣味に適ふ様の畫を畫くために、宗教の話しを借りたのである。而かも全く宗教を離れて純粹に風

俗畫や山水畫をも書き得ない。キリストを十字架から下ろして人が泣いてをる後には、山や野に、牛や豚がぶら／＼遊んで、百姓がぼんやりそれを見てをる。聖フランシスが示現を受けて、からだに十字架の傷を得て居る後には、山道に犬や騎馬の武士がぶらついてをる。總て只畫づらを美しく愉快げに見せて色の配合を作るためには、何でもおかまいなしに畫く。パオロ、エロチーゼの作で名高い聖母の受胎告示なども、上には神様が雲の中から飛び出、天使ガブリエルは雲に乗つて天から躍つて降りて來た。それに對してマリアは妙に腰を曲げて、それを待ちかまへる様な風をして、一體が輕わざ見た様である。十七世紀エチチアで貴族の令嬢と貴公子との輕わざが、聖母といふ名と形で畫になつたに過ぎない。畫でエチチア派は一つの間の子である。色合や配案ではポテセリ、ラファエルなどの名工の案配を折衷し配合して、而してそれを當時の貴族の趣味にあて

はめた。此が一轉して宗教を離れるとオランダ派の風俗畫や山水畫が出るのであるが、エチチア派は純粹に風俗や山水のみでやり通し得ずに、半分は古の宗教畫にくらいついた。此も當時エチチアの貴族が内實は利欲權勢の外に考へはなしに、外はやはり寺や坊主に媚びた根性の反映である。

それにしてもエチチア派がオランダ派の豫備を作つて、山水や風俗に特別の畫風を作り出した功績は没すべからざる事で、エチチアノが、聖母の幼時寺に行つた景を畫いた壁の畫などは、下は立派な風俗畫、人物畫で、背景の山岳はそれだけ別にしても立派な山水畫である。技倆は此れだけ進んだか、まだ清新の理想に進んで、自由に人間や天然を畫くには至らなかつた。ラファエルやピントリキオと同じ様な筆つきもあり、色にも配案にも似たものがありながら、總てが重く、しい、又いや味がある。寺や坊主には飽いて居ながら、尙十分にその

束縛を脱せず古に歸つて信仰の畫を畫くだけの清淨な心もなければ、進んで自由の空氣を吸ふ勇氣もない。而して色々の名工の模本に依つて貴族の趣味に媚びやうとした結果、この様な間の子が出来た。人はその色合に迷はされてテチアノを賞めるが、どうしても間の子は間の子である。ラスキンまでテチアノだけは賞めて居るのが自分には分からねぬ。

只一つテチアノの作で面白いものがこの畫廊にある。夕暮のうすくらがりの空に、二三人の人物がかたまつて、一人の死人を抱いて悲む。キリストの死んだ後といふつもりであつたに違ひないが、何人でもかまはぬ。死の悲み、生き残つた人の情が、物すごい景に表はれてをる。百歳の老年まで生きのびて一生の間美しい畫ばかり畫いたテチアノも、その臨終近くになつて、この凄い畫を最後の名残に残した。この一幅は彼れが一代の懺悔録といつてよからう。テチ

アノに色々の畫をかゝせて、或は自分の容貌に誇り、或は自分の建立した寺を飾り、又は家の座敷に御自慢の種にしたエチア貴族達は、この名工の最後の懺悔を見て何と思つたか。又今日でもテチアノの畫の美しい色に氣をとられる多くの人々は、この畫を見ても諸行無常、生者必滅の考へを起さないか。ヨーロッパの文明にはまだ現世に執着し酔ふた人々の勢力が多い。

正午すぎになつて館を出、今度は陸の路を歸つた。狭い町、高い橋、曲つたり渡つたりして宿に歸つて一休み。それからサンマルコの寺を見に行つた。東洋風とゴシックと混合した派手やかな飾りの多い正面に、寄石の畫が金色燦爛として、寺といふよりも新式の寄席とでもいひたい。中は柱と丸天井とアーチとの複雑に交叉した構造で、仰ぎ見る所は盡く金地の寄石細工に畫がある。うす暗い中に金地が光つて、天井もアーチも石に畫ばかりの眺めは、日本の極彩色の

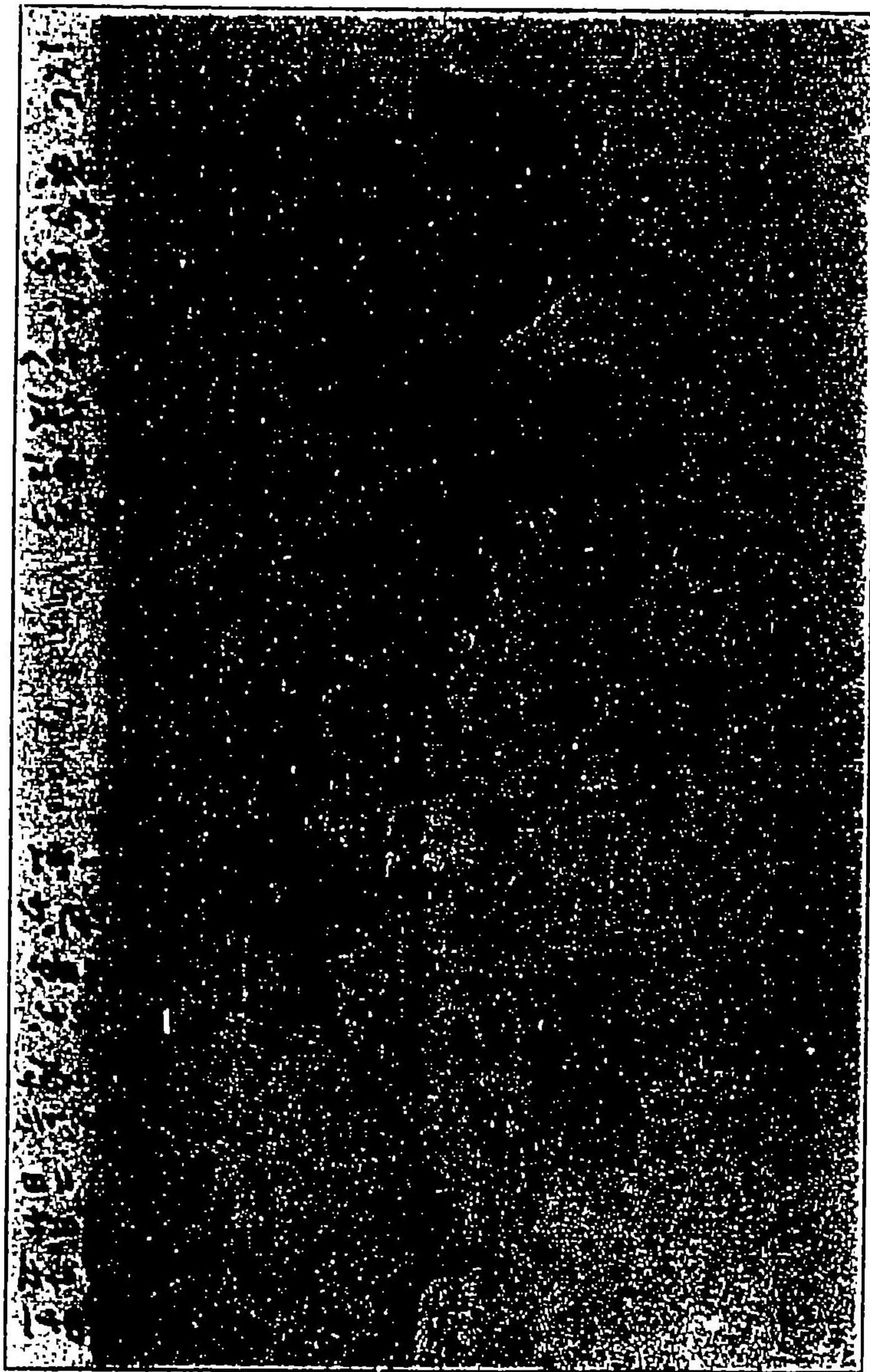
の堂でもとても想像し得ぬ。此もエチチアの盛時にその貴族等が集る場所として、あらゆる奢りを極めた残りである。拜壇の入口は石の柱に石の屏風、その入口の石段は層々半月形に重つて、拜壇の奥が暗く奥ゆかしい。誰かの畫でこの堂内の婚禮式を見たが、盛装の新夫婦がこの石段をおりかけると、下には澤山な貴族賓客がそれを待ちうけ、拜壇の奥には錦繡の着物の人々がついく。今は芝居でのみ見られる様な光景であるが、そういふ盛典が何度この堂内で行はれたか。つまり此の寺は信仰のために出来たのでなく、貴族がそういふ儀式を盛に行ふため、儀式を飾るために、金碧で造り上げたのである。

寄石の畫には後代のまづい作もあるが、又純粹のビザンテン風の面白い作もある。エチチアはその通商植民の關係から、多く地中海の東の方の文明を容れた。その東洋風がルネサンス後期の美術と

混合して出来上つたのがこのサンマルコの寺で、それと共にガラス製造、寄石(此も材料はガラス)製造が今日まで此の地の特色になつてをる。

堂を出ると案内がガラス製造を見せやうといふ。行つて見ると工場はほんの人に見せるだけのもので、つまり製造品を見せて賣りつけるためである。

再び堂の前を通り、その隣りのドージエの宮殿の面白い建築を仰いで、海岸に出る。ゴンドラに乗つて對岸のリド(Rido)に出かけた。行き路は海濱に沿うて、それから直に對岸に着いた。細い洲が長くつづいてをる。それを横断して並木道があり、散歩遊散の客がぶらぶらしてをる。並木の樺の花が風に散つて綿の如くに飛ぶ。その道を四五町行くと海岸。濱の松林にはホテルが建て連なつて、その庭には音楽があり、机を澤山並べて遊びの人がそこに一杯。濱の砂原



景の夕暮

には夏の用意に海水浴の小屋を建てかけて、濱は小屋ばかり。その小屋の先の渚には大分水浴してをる人がある。青海原を見ては一つ飛び込みたくなるが、時間もないから元に引き返した。

ゴンドラで今度は真直に灣の真中をエチチアに向ふ。北にはかすかにアルプスの山々を望み海の中から町の家々が湧いた様に、その間に處々つくつくと塔が見え、夕暮の鐘が水を亘つてきこえる。

以前はその中央に姿のよいサンマルコの塔があつたのであるが、數年前に瓦解した。それはなくとも面白い眺め。西の空には灰色の雲が出て、夕日は雲の端に入りかけて紅色の球をなし、その光りが紅や紫になつて静な水にうつる。ワグネルの手紙にも、毎日日の暮れにはリドに行つたとあるが、この夕暮は、古から畫家詩人の喜んだ景、どうしても畫中の眺である。

夕食の後に東の空に時々電光が見え出した。暫くして雨がぼつ

ぼつと降り始め、雷が鳴る。今までゴンドラの行きかひのあかりや、歌船の提燈で賑つた海面が俄に全く暗くなつて時々電光には宮殿や寺の白石の姿が見えては又忽に消える。雨は加はり雷も激しくなる。電光に見える寺々の姿も雨の中に幽霊の如く見える。この間の變化は全く熱帯の風光で、夢の中に夢を見る様である。雷も少なくなつたので眺めもなくなり、室に歸ると雨は尙降つて、向ひの家に音楽を奏してをる。

五月二十三日。

大河、古宮殿、雨中の別れ。

昨夜以來の雨ははれたが、空は曇つて蒸し暑い。小蒸汽で大川を行く。兩側はゴシク、ルネサンス色々の古宮殿。川を行くゴンドラの眺めは古と變らないであらうが、宮殿には石の壁の傾いたものもある。住みあらししたのも多い。古のまゝに貴族の住家で、その定紋の

船柱が立つて居るのは二三軒しかない。その他は役所か學校か又は商店か製造所になつて、古の傲奢の零落を語る。ステーション近くで船を出て、狭い河岸や、小路や橋を通つてオルト(Olto)といふ寺に行く。こゝにも多少の畫がある。テントレットの作などもあるが何となくそれ等を十分に見るのがいやになつた。同じ様な川の間の町を曲り曲つて北の海岸に出ると、その對岸の島が墓地で、シブレスの木立が見える。棺を黒いゴンドラに載せて送りの人も船であの島に行く、此の地の葬式には特別の趣があらうと思へる。ベクリンの「死の島」なども或ひはこゝいふ所から得たのでないか。

その邊は零落の跡が貧民窟になつて、立派な御殿作りの家に、窓から汚い洗濯物がぶらさがり、川から家に入る石段の石の取れた所もあれば、立派な浮彫の石で出来た戸口に鐵の戸の曲つたのもある。貧と不潔がこゝに集まつたかと思える。それでもその間を行くゴ

ンドラは色々の花を載せてゆるやかに水上を往來する。あたりの家の汚さに對して、さつきの紅や、デージーの白い花が一層美しく見える。

雨がふり出した。大川に出て汽船で元の路を、宮殿を眺めつゝ宿に歸つた。雨はしよぼ／＼ふつて宿の縁側から寺々や港の眺めは泣いた様に見える。まだ見物すべきものは澤山ある。ドージの宮殿もまだ見る時間は十分にあるが、どこに行つても貴族趣味の建物や畫や寄石に飽いた。夢の様な所ではあるが、暑くると長い夢で、長く居れば居るほどその暑くると長い苦みの様な感が増す。ロマで既に飽いた。この地にも長く留るのは全くいやになつた。僅二日の滞在ではあるが、今日此の地を去ると決心した。中食の後に、荷物を整へて午後は宿の座敷で海面を眺めながら手紙かき。

嗚呼イタリアの二ヶ月も今日が終り。ルガノの春の花に始まつ

て、エチチアの夏の雨に終る。アンジエリコの畫には心の糧を得、フランスの古跡には敬慕の涙を注いだ。それと共にロマの複雑な生活、エチチアの暑くらしい貴族趣味、色々の變化の中に色々の教訓を得た。ロマ帝國の統一といひ、エチチアの地中海征服といひ、このイタリアは地中海だけが世界である間は、世界の女王であらうが、今日より以後にはその望みのある筈がない。それでもイタリア人は尙往時の隆盛を追懐して、多少それを將來に夢みて居るらしい。その夢を宗教に現はさうとするものはロマ教會政治に現はさうとするものは今のイタリアの愛國者。而してその夢がイタリアの内部でもワチカノとクキリナレと相對して争つてゐる。その夢は將來どうなるか。イタリアの美術も面白いが、このイタリアの夢の將來も面白い。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

雨の中をゴンドラでステーションに向ふ。蔽ひを垂れた下から家々の臺石、石段のみが見え、水がその石をかむでがぶり／＼と音がする。雨のしめやかな水中の町の趣きは、泥によごれる他の町と全く違ふ。

七時に汽車は出て雨の中に水中の町を見返す。陸地に歸れば雨にぬれた木々の緑が真に美しい。水中の宮殿よりは天然の緑の方が清新で、暑くらしい夢のさめた心地がする。エチチアの町には零落の跡が多いが、おつびらいた野の雨に濡うた緑には生々の氣象が充滿する。

我れやいづこの記

外篇 第一

— 日二のアチ子ぞれ別のアリタイ —

VENEIZA.

Fu il sospiro del mar, né vide il mondo
cosa che fosse di costei piú bella;
e quando Italia lagrimava ancella,
libera diffondea l'inno giocondo.

Ebbe mistiche nozze, ed il profondo
flutto ricinse la fatal donzella,
e in mezzo al perversar della procella
la vittoria le aperse il sen fecondo.....

Ma, poiché i tempestosi abbracciamenti
or le diniega il mar, franto l'amore,
e a nuove terre dà l'amplesso infido;

sparsa l'algoso crine, e i rilucenti
sguardi conversi alle fuggite prore,
tende le braccia, e si congiunge al lido.

(Giuseppe Revere)

三十五年十月十九日。イギリスの別れ、パリに入る。

昨夜きょしベートーエーンが第六シンフォニーの管絃尙ほ耳の底に響けり。されど今日はたのしかりしこのロンドン去らざるべからざる日なり。後髪牽かるゝ思ひするこの離別の哀れを消さんため樂聖はかのフナレの意氣壯なる管絃をわが爲めに作りしにはあらざるか。われは彼の樂譜を心の中に奏しつゝ、この離愁を消さんのみ。

時は來りぬ。車夫は鞭を揚げ、馬は足すりしてわれを拉し去らんと待てり。言葉少なに家人に別れを告げて車に乗る。晩秋の曇り勝なる空に、ロンドンの町々は薄紅の霧にうす暗し。幾度か管絃の樂をきょし樂堂の傍も過ぎぬ、幾度かそのベンチに腰かけて沈思に耽りし公園をも馬車は馳せ通りぬ。ヴィクトリア・ホテルの大館は霧

の中に現はれ、その裏なる停車場に身は既にありて、列車に入る人々の聲擾々として吾が耳をうつ。

霧は雨となりて四邊濛々たり。テームスの橋上より見し聖ポールの大ドームはロンドンの最後の印象なり。眼を閉ぢて、過ぎし半歳の此の都に於ける生活を追想して、われは獨り悲しげの笑を漏らしぬ。

雨に風さへ加はりて、列車の馳する音すさまじ。親しき友の家に寐起きして、中世武士の家居生活も偲ばるゝその家族と共に楽しくくらし、レドヒル (Redhill) の森を見れば、別れを英國に惜むの情再びむらくと起る。緑の牧場も雨に濡ひ、秋風になびく柏の木の下に、牛は縮み伏せり。哀れの動物よ。されど明日雨去りて日光朗なれば、彼等は又きのふの緑草の上に温き日影に浴びん。而してわれは今夜以後、先きはいづこともなき飄遊の客となりて、再び英國の牧

場にかの友と共に牛や羊に草飼ふ能はざるなり。

船は將に港を出でんとす。西風に浪だてる海峡に潮の泡飛で雪の如し。港口なる砲臺の下を走る頃はこの泡も波濤のしぶきとなりて、豪雨の如し。されどわれは尙甲板を去らず。アルピオンの島の南を限れる断崖が浪に隠るゝまで立ちて後船室に入れば、眩暈に惱める船客の呻吟の聲のみ濤聲に和してきこゆ。

一睡の後、甲板に出づれば、ノルマンデーの海岸、絶壁の上にゴシックの高塔見ゆ。浪漸く静にて、船は港に入る。陸上に往來する婦人の丸く廣き袴を穿ち、黒布にて頭を蔽ひたる姿も古雅なり。荷物を手にして、我れ一と船を出づる旅客の群に入りて、我もフランスの客となりぬ。丘の崖に木の葉は黄にはや禿となれる高木に囲まれたる百姓屋の藁屋根は雨に濡ひて黒し。丘の間、小川の邊、列車は南にはせて、美しきルアンの町のどかに流るゝセイヌの河水も今は短き秋

の日の暮れがけに見て過ぐ。暗の中に窓の光漸くしげく、街路のガス燈、鐵道の下に現はれ、列車は電燈に照らされて停車場に入る。歐洲に入りて第三日に踏みしパリの街頭を再び馬車の中より見て宿に入る。晚餐の卓上、晚翠其他の友と共に赤酒の盃を舉げて、談笑他郷にあるを忘る。

十月二十日より二十八日。パリの滞在。

パリに入りて第一日、ルーヴルに行き、セイヌの河畔を逍遙す。第二日、エルサイエに遊びて、十八世紀の王者豪遊の跡を見る。第三日、ギメー博物館に行く。途上エッフェルの塔に上る。雲を凌ぐ高塔も、四邊の森や山も、三年の昔に異ならず。されど、彼の時脚下に見し博覽會の白堊の大館今何れにかある。噴水と電燈とにて、龍宮も及ばぬ奇觀を現じて、幾十萬の人を集めしシャトードー(Chateau d'Or)今は哀

れに骨のみ残り。ガスの白燈と緑樹芝草と相映じて、樂隊の奏樂その間に起り、白衣の婦人、黒帽の紳士が群がりし大庭に、今は秋草車の轍にひしがれて、處々の窪に雨水の溜れるあるのみ。かの時共にこの塔上より、揚れる意氣に四邊を睥睨して、快哉を叫びし乙羽君も今は已にこの世の人にあらず。われ亦獨り不盡の愁を抱いて、再び此處にあり。乙羽君が「春風にふらくと上るあけ飛雀」の句をはがきに書きつけし事思ひ比べて、我は轉たこの秋色の蕭條を傷むの情に堪へず。

尙三日四日つゞけて、晝はルーヴルなど博物館を見、夜はオペラに行く。されどラッセル前派を喜ぶわれは佛國の十八世紀其他の繪畫それほどに思はず。又ワグネルの樂劇はオペラの弔鐘なりと信ずる爲か、スポンテニヤグノーのメロデー何となく面白からず、早や興も盡きたれば、パリを去る。

停車場にて見送りの二友に別れ、われは再び孤獨の羈旅の人となりぬ。

十月二十九日、三十日。ジチーヴよりベルヌへ。

過ぎ來し佛國の平野に日は入りて、秋の夕べはや暗し。漸く山路を登り行く汽車の中に、ひとりすぎこし方を懷へば、思ひは秋の林の木ノ葉よりも繁し。

いつしか眠りに入りし間に、夜もふけて、汽車は電燈輝く町に近づけり。車を捨て眠れる給使をおこして、此處ジチーヴの旅舎に入る。愛する瑞西の淨き寢臺に再び眠るうれしさ、されどこれも暫しの宿りなり。

朝霧湖上をこむ。落葉をふみ分けて湖畔の公園に逍遙す。この

市が佛國の羈絆を離れてヘルベチア同盟に復歸せし紀念碑の邊りに市民が植ゑたる常緑のアルプ樹木は國の自由と共に榮え、天然兒ルソーが形見湖中の島に残りて、秋風の中にも自由の兒等の戯るゝ愛らし。而してこの風光、この湖邊の風光は曾て吾が師の壯年の生活を圍繞せし昔ながらの姿ならずや。ルソーの像下靜に北歐なる吾が師を想ひて一書を認む。

名残りは盡きざれど、正午すぎこの町を去る。路は林に入り、落葉地にしきて滿地黄金の色す。汽車は山腹を上り行き、眼界は上るに従て擴がれど、霧立ちこめし湖上の帆船のみあはれに靜なる水面に漂ひ、彼の岸の山々夢の如く淡し。ロザンの清らかなる市街を山上看つ。フライブルヒの古塔をタールの河邊に眺め、頼みなき再遊を期して過ぎ行く。薄暮瑞西の首都ベルヌに着く。

百丈の河岸に聳ゆる聯邦政府の建物、此も光榮あるヘルベチア聯

邦の中心たるのみならず、又實に平和的文明の爲めの幾多世界同盟の首都なるを思へばゆかし。くれ行く秋の空に家路にいそぐ車馬の橋の上、山の崖にきらめく燈火も、何となく平和々樂の趣あるを覺ゆ。秋の夕風に吹かれて、夢の如く世界平和の未來を考へつゝ、思ひに耽る中に日も全く暮れぬ。「穀倉の穴倉に入り、ゆかしき瑞西の葡萄に作られし酒幾盃となく傾けて後、宿に歸りて寢に就く。此夜夢にヘルベチアが平和の女神と手を携へて吾れを招くを見ぬ。

十月卅一日。四州湖、テルの村、手向けの花。

朝早く古き市廳、古き街の中央に泉の上に立てる十字軍士や、笛吹き小僧の像を見て、中世のゆかしさを思ふ。

汽車ヘルヌを去りて、路は山又山を渡り、林を出で、は林に入る。時雨に濕ひたる林樹見渡す限り黄色なし、汽車止まる時停車場の鐘

は牧牛の鈴と和して、秋の空にも人界の平和この山谷に充つ。野中の一つ家はとざゝれて、夏なれば白巾を振りて行きすぎる旅人の健康を祝する乙女も見えず。岩角の古寺、半ば雲に隠れて、白衣書を手にする修道僧の姿もなければ、山谷の平和、畫中の風光に、吾れは汽車の早く行きすぎるを憾とす。

雲霧の間にピラートの一角巨人の如く現はれたり。脚下には四州湖より流れ出づる清流深碧なして流れ、岸の彼方にルッセルンを圍む古城壁見ゆ。

汽車を棄て、四州湖の岸に立ちし時、嶽山迫りて水碧く、吾等を載せて行かん船の白く浮べるを見し時、吾れは喜びにもあらず悲みにもあらぬ感に全身水あびしを覺へぬ。去年の夏、此の湖畔にさまよひて、涼しき夕ぐれ、静けき四聯奏クワリットの樂をきゝし時。かの山に登り、この山に攀ちて、異色の人をも異邦の民をも隣人とする瑞西の民と、鳥

の鳴る音に似たる歌挨拶を交はせしかの時。いつ再びするを得んか。あゝ吾れは今この邦と別るべく湖岸に立ちて、今に舟乗りせんとする身なり。

此の町に留まりて曾遊の追懐に、せめて一夜を明かさばやとは思へど、前途イタリアの美國に急ぐ身の、此も思ひ切りて船に乗る。船は岸を離れ、碧水を破りて進む。其の残むの波面に、寺塔も白堊の家も、丘陵城壁も小うなりゆきて、行く手の山は動くが如く近づく。左の方、湖面遠く開けて山頭のあなたに見ゆる空は、なつかしきツューリヒの會棲ならずや。右の方、芝草の前栽斜に湖水に迫る處、高き樺の並木に圍まれ、遠く世の塵を離れて立てる一つ屋、是れ吾がツグデルがトリプシメン (Tribschen) の舊居ならずや。

思へば三年の歐洲生活の間、吾が光りとなり、吾が慰みとなりし、吾わが一生の光り、力なる師が作曲の主なる者は、その言葉も、樂譜も、多

くはかの家にて作られしなり。「アルキューレ」の「春と戀と」(Lenz und Liebe) の歌がかき下だされ、音譜が師の心情の泉に湧き出でし時、四州湖の夜の春風、いかに軟かにかの家の窓を開き、アルプ山上の月光いかに澄みてその窓を照らしけん。ブリュンヒルデが「愛の全能」(Liebesallmacht) 成りて、その譜が師のピアノに和して、始めて歌はれし時。

悲みの中に力あるその抑揚の音も、ゆる愛の炎の中に融合寂靜のひびきある樂器の音が、いかに碧き水を渡り、和き風を掠めて、四圍の山谷に嫋々の餘音をといめけん。思ふだに心ときめき胸波だつ。

特にゆかしきは師の男兒を設けし時、その喜びに作られ、かの庭に奏なでられし「ジグフリード牧歌」Siegfriedidyll にぞある。天然兒ジグフリードが、林間に鳥と共に歌ふ平和の譜、洋々として寂靜の湖邊に起りし時、湖水の魚いかに耳をそばだてけん。しづやかなる絃樂の平和の中に、管のひびき漸く起り「戀の決心」(Liebesentschluss) の

やさしくも意氣ある高潮に、人生至奥の愛の聲が、師の最愛の妻女と初生の愛兒との頰を奏でし時、山の靈、森の魂も聲を管絃に合はせて、いかに天地と共に愛の譜を歌ひけん。樂堂にきゝしかの曲、今はわが心の中に湧く。管のひゞき徐に收まり、柔らかき絃の音に、眠れよ、わが兒よの守り歌、わが頬をかすめて空に鳴り收まりぬ。眼をあぐれば、水は碧く、山は高く、かの家は高さ木の間に閉ざされて小うなり行く。船は情なくして進み行き、蕭然たるわが思ひの中にかの家もかの並木も遠ざかりぬ。船の食堂に入り、瑞西酒を傾けて離愁を消す。されどジグフリード一曲尙ほ耳にあり。

去年リギより下り来て、甘き無果樹の實に渴を醫せしウツナウの水舊に依りて深みどりに、ブオツク濱、ブルンチンの浦、船着き毎に舷頭の鐘聲山にひゞき水を渡りて靜かに、平和なる山村水浦に素質なる村人、舟人と親しげに物言ひ交はす。湖面はシルレル石と共に右

に開けて、水の極まる所、山と山の左右より迫る邊に、フリーレンの村の寺塔、獨り白く見ゆ。甲板の上には、われと學者らしき人の娘を伴へるとのみ、冷き山風に浴みして立てり。われは山水の大に打たれて、默想に沈み、かれは地層の説明に、山と水と相送迎す。

簡單なる馬車に打ち乗りてアルトドルフに着きし時、山村の夕煙、碧く山々の半腹にたなびき、村寺の鐘の音、谷間に逝く日を弔す。顧みれば四州湖の水面、遙に影の如き山の間に湛えて見ゆ。

面や手を洗ひ清めて後宿を出で、入るとしもなく村寺の門に入る。來ん聖徒祭と精靈祭との營みに、村人は各がじゝ花環を携へていとしき亡者の爲に墓前に燈火を點す。薄暗がりにもしるき花環の白き花、あはれこれなき人のありし昔を偲ぶ涙の玉か。並び立てる十字の墓標の間に、星の如く閃く光、あはれこれやあす祭らるゝ精靈の道のしるべぞ。冷かなる秋の山里の夕風に、行き交ふ人の歩み

もしめやかに、靈も浮世にして浮世ならぬこの夢幻の境には現れぬべし。堂内に入れば光りは僅に聖壇の邊り、聖母の像前をてらして聖き香の匂ひ先づ心にしむ。堂守が足運ぶ音の外、机の前に跪きて祈念凝むる人の祈りさゝやきのみかすかに聞こゆ。われ何となう神の愛に惹かれ、暫しは村人と共に聖母の前に跪きて、己れにも知れぬ祈りをささげぬ。

客はわれひとりなる晚餐の後に、瑞西の牛乳の温きを飲みつゝ、宿の人々とうちとけて語る。君はドイツの人とも見えさるるにても瑞西の國を能く知り、又シルレルがテルの文をも能く誦し給ふ事なども。話しはテルの戯曲に移り、この村にて夏毎に行ふテルの演戲の事、宿の主人が若きとき、テルに扮せし時に、ヘドキヒの役つとめし村の美人が事、さてはそれらの寫真など示され、村の歌樂組合にてテノルなる主人の歌ふ歌なども聞きつ。同じドイツ語の者にて北

の平野と此の山國の民との差ひも差びし事よなど思ひつゞけて身は異境にあるを忘る。

室に歸りて机によれば、窓前の寺鐘既に十一時をつげて、山谷の空氣に陰としてこもる。今日の晝、山村に聞きし鐘の音、さては去年ピラドの麓にて聞きし牧牛の鈴の音など思ひ出だし、きゝし鐘の音を草す。寢に入る時、四邊只寂寞の聲す。壁間に懸けたる聖母の像を暗燈の光りに眺めつゝ、いつしかね入りぬ。

十一月一日。山陰の雲、山陽の碧空、聖徒祭の勤行。

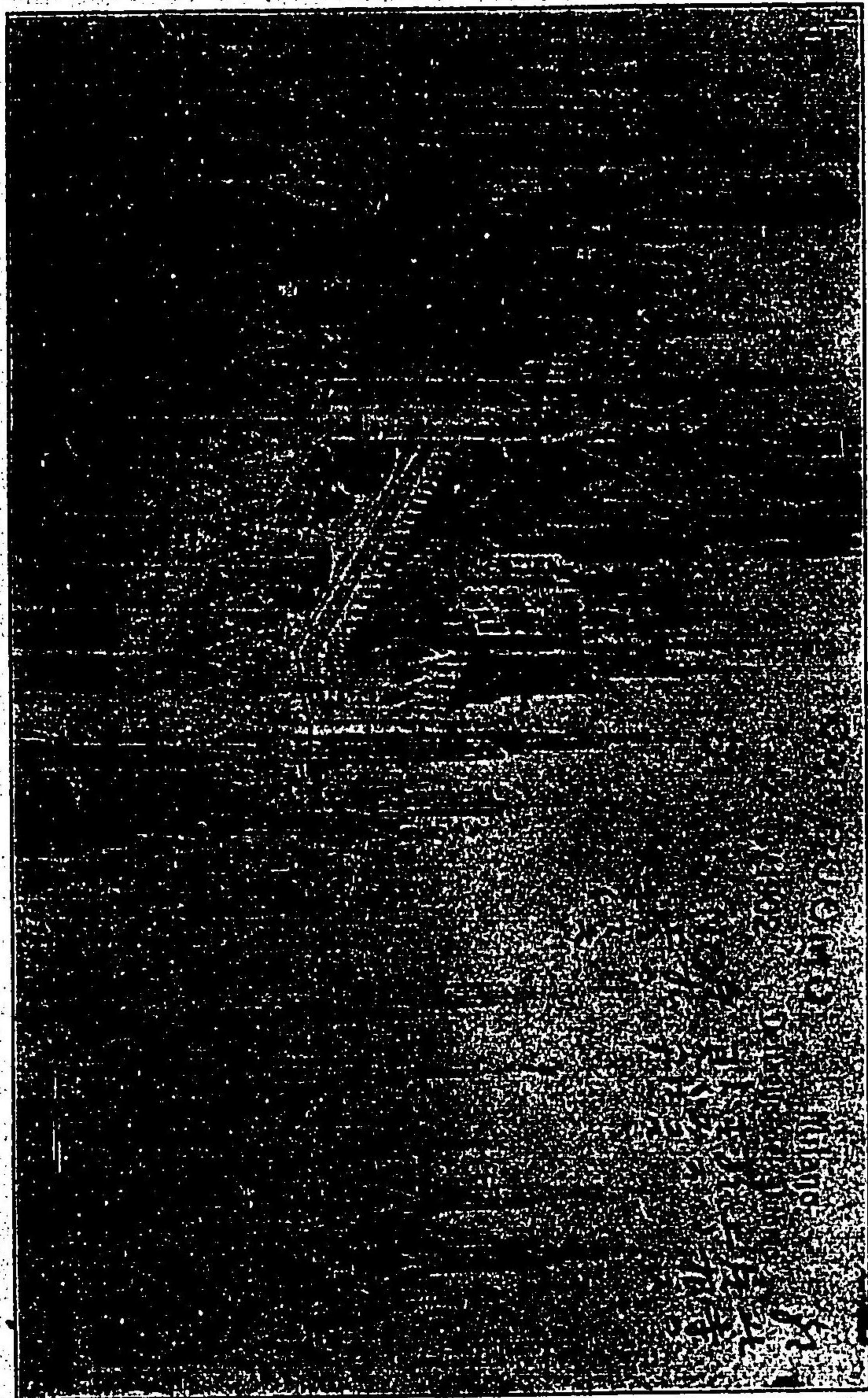
おき出で、清き谷水の冷なるに身體を拭ふ。此の國の乳、此の山のバダもこれを終りと、朝食に幾片のパンを盡す。

テルの紀念銅像、テルの古屋など見て後、アルトドルフを去る。汽車は谿を渡り、山を縫ひて登り行く。谿川には石露はれて水清く、山

山の木立霜がれて、その嶺の上、雲間にはの見える白雪には旭日の光
紅を染む。登り登りてゴットハルトの時、ゲッティンゲン村にて車を下る。
雪は地上處々に白く、見あぐる山々嶺々の氷雪雲霧の間にまばゆく
輝く。山上の家に入りてはがき幾つか、北歐の友に別れを告ぐ。北
歐の天地此より永く過去の夢に入らん。

急行車來る。ゴットハルト四里の隧道を出づれば、嶺北の天地に引
さかへて、天は碧く日光まばゆきばかり、野には草の緑尙は見ゆ。山
一重にてかくまでの差ひ、北には霧の空、冬の風、南には碧き大空に春
の風そよぐ。タンホイゼルの羅馬行の歌の中に「イタリアの軟き野
邊」といへる句、今特にその味ひを知る。

鈍色の布、細の帯に身を包み、痛みある胸一つに、悔みと惱みとの心
を貯へ、後には己が爲めに祈り且つ泣く戀人の涙にわれも泣き、前
は罪障消滅の聖音を唯一つの望みとして、日もくれ足もそらに、かの



アルプの岩角、このイタリアの野邊を踏みしかれを想へば、われ亦その痛みを覺ゆる心地す。山々の若緑いかに美しくとも、心に木枯らし、吹きすさぶかれの眼にはその緑り如何に映じけん。野邊の若草いかに軟くとも、悔みの血潮滴るかれが身には、これも悔みの種となりたるらし。惱みは異なりとも、われも亦心一つの平和を世に求めかねつ、北歐の冬、北海の嵐に二歳をすごし來て、尙も飄浪の身と心とを抱きて今南歐の天に入る。いつかわれも亦、淨き愛の光りに救はれて、タンポイセルが最後の「恵みの奇蹟」を歌ひ得ん。

ルガノの湖邊、旅人の往來しげく、碧き湖水、聳てる峰、皆碧空の下に照り輝き、湖畔、山腹の墅莊、壁白き前には柑子の實、緑の葉の間に黄金色どる。あゝわれは今已に *Kunst des Land* のその國にあるなり。ミラノに入りて先づレオナルドの紀念石像を見る。あはれルネサンスの風雲を叱咤して、繪畫に塑像に、哲理に實驗に、各々後に來る

べき大動搖の豫言者となりしこの偉人よ。人は利慾の衝に迷ひ、世は興亡のわだちを廻れど、人の世に靈の光りあらん限り、地の上に藝苑の種盡きざる間、汝の靈は美はしき泉となりて流れ、汝の智慧は妙へなる光もて人の世を照らさん。東海の遊子、美神の特寵を受けたるこの國に入りて、先づ汝の像前に禮して美と智慧との光榮を祝す。行て堂母に入れば、堂内には方に今日聖徒祭の神事行はる。コーラスの妙音、香の煙と共に檀を度り、屋に響きて、われも共に聖徒の讚美を歌はん心地す。

堂を出づれば、妙なる天樂に引かへて、電車の吠ゆる音、物賣の叫びいとほし。闕一つを出で、われは再び廿世紀の惡世に返りぬ。されど茜さす残んの夕日影、白大理石の堂塔を染めては、古も今もかはらぬ光りおごそかに美はし。

十一月二日。堂屋、ブレラ、レオナルドの畫。

朝早く堂母の屋上に登る。霞みたる空得もいはれぬ薄紅の色して、見渡す平野、平和の光りに包まれ、その中に屹立せる堂母の尖塔、白く輝きて天に朝す。この間に徘徊して聖徒、天使が白大理の石像と併で立てば、身は天界にありて聖衆と共に淨き光に浴するを覺ゆ。屋を下り、堂内に別れの祈りをささげ、狭き町をすぎブレラ (Brena) の宮殿に古畫數多見る。ラファエルが「聖女結婚」わが胸にはひかす。マンテニヤの「キリストの尸」これもキリストの傷や血に信仰を養ひし十五世紀の名残なるべけれど、肉體の傷や血は如何に實らしく寫されたりとてわが信は血ならぬ血を求むるを如何にせん。心ゆくばかりなるはレオナルドが最後聖餐に於ける主の面にぞある。小き畫幅は幾年か古棚に棄てられて、蠹魚の跡、幅に充つれど、かの偉才が主のこの世を辭せん前夜の決心と離別の惱みとを畫き出したる

その筆の跡、今活けるよりも明にわが呼吸に入る。傾ける首、半ば閉せる眼、そを描き出したる筆、少なる模寫の中には救ひの力と萬斛の涙とこもれり。如何に巧に書きなしたりとてマントニヤは皮の上の血を畫けり。如何に軽く筆を運ばせしとも、レオナルドは肉の中に靈を發揮せり。あはれ形と色とのみにて畫を成す今の畫師この一幅を如何に見るや。

恍惚の中に時も移りぬ。いそぎてグラチエ(Grație)の御寺に入りてレオナルドが壁に畫きし「最後聖餐」を見る。年月と武人とに毀たれ、その上凡手に塗抹せられし今のこの畫よ、畫聖の靈あはれ泣きぬべし。アンブロジオの古寺にゆかしき千五百年の跡を見、ロレンツォに神事に參して後、この市を去る。

ポーの川水に入日さし、沃野に烟こめて今日も暮れぬ。新月凄く古塞の壁に隠れて後、山一つ越えてわれはゼノワに車を下る。コロ

ンボの白き像が電燈の光りの下椰子樹に圍まるゝを一瞥して宿に入る。

十一月三日。ゼノアの港、リギエラの海岸、フレンツェ。

山に沿ひて市を圍れるユルソの路より、雄大なる海洋の煙波を望み、カリニヤノの寺塔に登れば、後に山塞を顧み、前に港灣を控へて、形勝の雄大を、ろに雄を地中海に誇りし海市の古を偲ばしむ。

ゼノワ公の邸宅の今は市廳となれる、堂母の邊に旅人をあての賣物店並べる、赤宮の中に古の貴族が、豪華の跡の残れる、匆々にして見巡る。名高きカンボサントをば惜くも割愛して半日にしてゼノワを去る。

路はレヴァンテの海岸に沿ひて、岬頭を望みては浦曲を廻る。日影まばゆく、海は空と共に春の蒼き光をたゞよはし、山の岬浦の崎に立

て連れる莊邸は椰子の緑葉と黄金色の柑子とに圍まれ、その間にシ
プレスの數々高く碧空を劃す。故郷にありて肺に惱める友をして
この境に悠遊せしめば、その煩ひや、如何に早く去らん。かの友この
邊りに住居して、われは今かれを訪ひ行かん身ならしかば。

カルララの山白く見ゆ。山に靈あらば、その山腹より出でし大理
石が二千年來盡くる事なく幾多の工人に彫られて、活きたる神像や
人體を作り出せしを誇りてん。

夕日の名残かすかなる時、ピサの斜塔近く過ぐ。寺の邊り墓地に
今日は聖靈日の花をたむけの人多く見ゆ。

夜暗うして、久しく夢みしフケレンツェの都に入る。宿に近き御寺
の鐘をきつ、つゝ眠りの床に入る。

「眠れ、甘き夢見よ。浮世の憂き事、汝が夢に觸れざれ。」その甘き夢
の跡に、遊子の夢は「神の詩人の跡追ひぬ。」

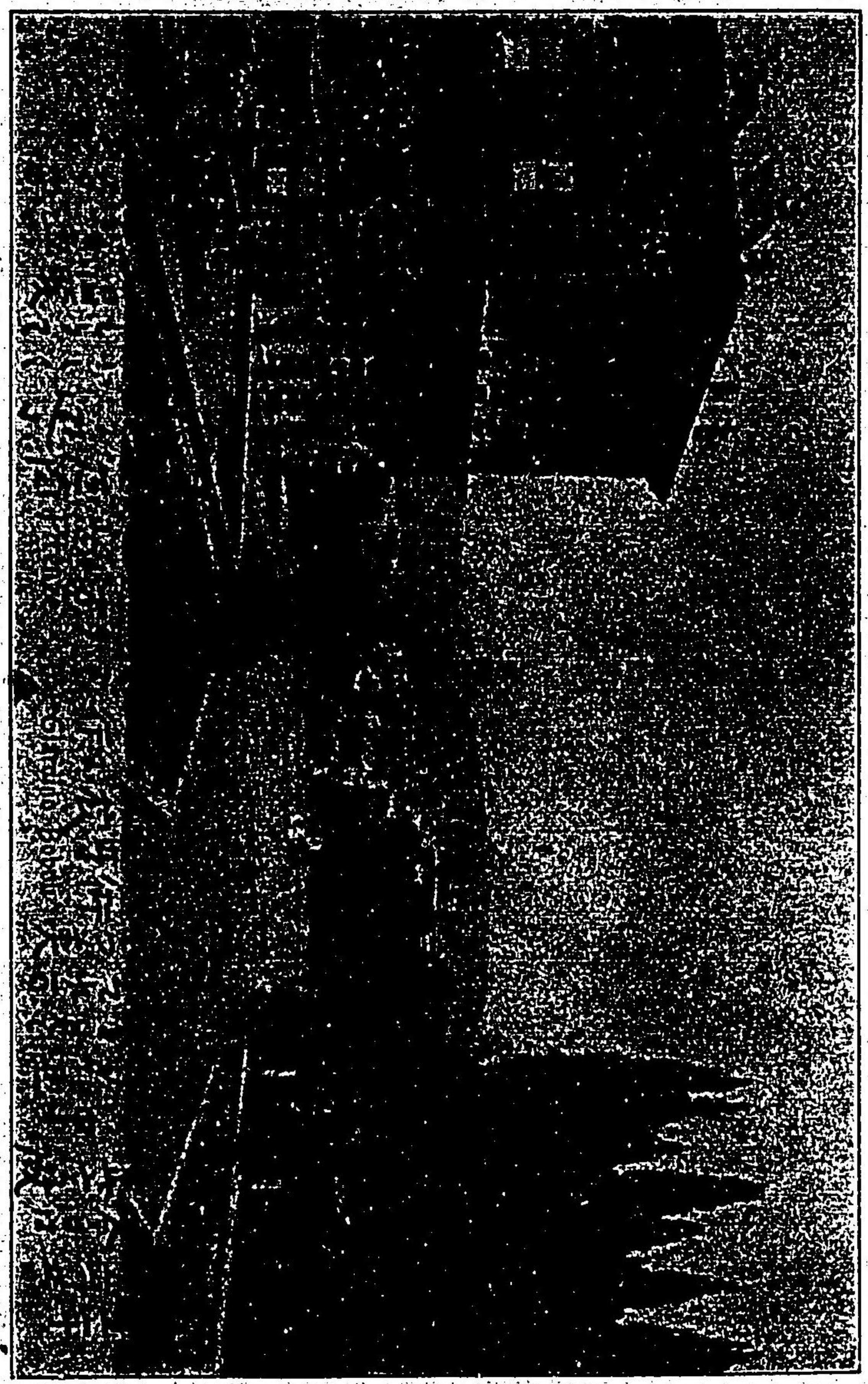
十一月四日より十日。花と詩との都。

花と詩との都 *Città di Fiori. di Poeta* 天涯地角町といふ町の中にこ
の都ほど美の神の恵みを受けし處他にありや。幽府に入り天國を
見し詩聖もこゝに生まれ、人界の花を刷毛の先に咲かせし畫聖の數
々、白き石に生氣吹き入るゝ小造花翁、皆こゝに出でゝその枝をこゝ
に残しぬ。十四五世紀の間、信と想との高潮こゝに集ひて、ルネサン
スの花を咲かせしアルノの河畔。足その地を踏みしのみにて、心
ときめき、血潮湧く。天をつく鐘樓の下に立ちて聖衆並べる堂母の
石の壁を仰げば、その上、市民が信神の誠と富の力とにこの大堂を造
り上げし意氣を偲ぶべし。古宮殿の廣間廣間には古畫名作の數々、
見れば眼應接に暇あらず。片隅の狭き町に立てる古寺の柱にも遠
き歴史あり、市場に立てる塑像一つにも深き詩趣あり。

着きての後初めの日はウフサチ (Uffizi) やピッテ (Pitti) の宮殿に名畫の色に酔ひ、次ぎの日はメデチ家の墓に、天才の刀に活かされし石を見て心を幽明の間に馳せぬ。或る時はサンマルコの古僧房に活けるキリストの姿に接し、或る時には十字の寺、聖者フランシスの畫傳に渴仰の涙を流し、又或る時には聖母の新御寺なる小御堂に學僧トーマスの盤を拜しぬ。かくて日毎に見るものは美の靈か、さらすば信の魂の現はれ、行く處々に接するはルチサンスの昔の光榮。一日を終りて旅寓に歸れば、心は恍惚として彩雲光霧の中に彷徨し、美はしき天つ御空の夢路をたどる。感嘆、追慕に心も行衛を知らねば、鑽仰、嘆美の筆運ぶべくもなし。かくて靈の花さくフオラの里に幾日は東の間に過ぎぬ。名残りはいつまでも盡さるべうもなければ、あすは去らんと、一夜をゆかしき思ひ出に明かしぬ。

いつ又來べきとも知らぬ別れには、數々の御寺を巡り、丘の邊の木

(11) 四回 四回 (要略)



木邊の丘を巡る御寺の數々



チベロ河上天使塔と聖ヒエトロ

(四六五頁参照)

立、園生のうてなに逍遙して一日は早く暮れなんとす。夕暮の空に
高塔鐘樓の姿を眺め、燈火にうつる御寺の壁を最後の名残りに、閉ざ
す車の窓の中、瞑目すれば身は早や汽車に乗りて去るべき停車場の
裏にあり。

暗路をたどりてロマの都に着きしは深更。宮殿、石柱の間、人通り
も少き町を経て宿に入れど、心は尙アルノの河畔にさまよふ。

十一月十一日、十二日。永遠の都(上)。

こゝも亦不思議の都。一度は兵力にて世界を掩有せし大國の都、
それより後は神の玉座に萬國の人心を支配せし「永遠の都」。古のバ
シテオンを見、テペロの河の流れに臨む古墳を仰ぎ、狭き石道をたど
れば、教會の礎、聖ドエトロの大堂面前に聳ゆ。蟻が高屋に出入する
にも似たる人々の群れと共に我れも亦その堂に入りて身の小さき

を覺ゆ。並び立つ石の柱、仰ぎ見る大塔の圓蓋、その間に立ちては、己が六尺の身體が宏莊の威嚴の中に消えなん思ひを抱く。是れ亦信者が教會に對して抱く感にあらずや。フロンツェの寺々には調和の美あり、こゝロマの大本山には壓服の威あり。餘りの半日はヴチカノの宮殿ラフェル等の壁畫の前にてすごしつ。バルナツの山、アテナイの學堂にはギリシヤ精神の復活を見るも、「論議」Disputaのキリストには只神學の教理の見る。さるにても、壁といはず天井といはず、色美しく形正しき大幅にて飾りつめ畫き充たし、連る廣間(Stanzee)の數々を一つの魂に作り上げし不思議の畫才よ。

寺を出で、シヤニコロ(Gianicolo)の丘に上れば、七丘臺の宮殿寺觀重なり簇がりて、薄き夕日の茜に染まり、西の空にはビエトロの大塔巍巍として千古に秀ぶ。

次の一日(十二日)は廢墟の間にさまよひてすごしぬ。一國の崇敬

を集めし神の宮居も柱のみ残り、歴代の帝王がその勝利を誇りし凱旋の石門も石切れ、彫物はげたり。神事大路の敷石曾ては壯麗の行列が華を飾り旗を翻して過ぎし道、僅に地上に露はれ、百敷の宮居に姿は花の齋女が火を祀りし跡、今は苔むす石の壁に灌木茂る。

夕暮れバラテノ(Palatio)の丘に上れば、日は西の方ワテカノの丘に沈みて、夕陽の光り斷柱殘壁に紅を染む。勝利の天父(Jupiter Victor)が肚殿の廢墟、石の壇に憑りて想ひを興敗の跡に馳すれば、心は古今の歴史と共に千古の歲月をたどりて無限渺漭の中に彷徨す。

兼爾たる丘上の一種族、忽にして連衡の一王國、忽にして四隣睥睨の大共和國、而して終に地中海を庭中の湖とせし世界統一の大帝國。その間、幾多の活劇、進運、皆この七丘の都府を中心として起りしならずや。種族と種族と相戦ひ、貴族と平民と相闘ぎしその舞臺。幾多經國の大雄辯をきき、繰り返し繰り返して世界征戰の師の凱旋を迎

へしも、皆このテペロ河畔の小地域なりしなり。而してその始めロムルスがこの大歴史の源を開き、今もこゝに残れるかのロムルス壁を守りて隣族と相對せしその本據は、即ちこの丘陵、方十餘町にも足らぬパラテノにてありしなり。

あはれ今日も亦かなたプラカノの丘、聖ビエトロの大堂母に沈み行き、あすも亦カンパニの荒野に昇らんかの太陽は、世界の始め以來、幾度かこの丘、この野を照らしけん。日は毎日に同じ光を放ち、七丘臺の岩根動く事なく幾千の星霜を経ぬるその間に、人は幾たび生まれては死し、國は幾度か起りては仆れ、仆れては又起りけん。古の人が大海の一粟と人の世を觀せしも、理りながら、その一粟の人生に世の運命のあやしきまでに轉變の姿を示し、その轉變の中に奇しくも大なる活劇を演じつる跡、今眼前脚下に横はれり。

人は生じ人は逝く、世界の權を掌に握りし諸王も逝きぬ。神も鬼

も亦死す。死するは鬼神のみかは、大洋も乾きぬ、岳山も崩れぬ、北斗も解けて散りぬ。さなり變轉は人の世のみにはあらざりき。わが今立てるパラテノの丘、かなたに並べるプラカノ、キリナレの丘、カピトルの頂き、人間知りての後の歴史はこの七臺の上、ロマ城四壁の中に起りぬ。されど七丘の起伏せる地、テペロの流るゝ野、皆曾ては大海の底なりき。北と東サピニの連山碧海の限りをなし、波濤靜かに今のこの邊りに躍りしは、あはれ幾萬年の昔ぞ。俄に湧く波濤の洶湧と共に海の面に浮び出でし灰の塊、石の塵、魚介獨り驚きて人は未だ此の世にあらざりき。かくの如くにして世界の首都ロマの基礎海底に据えられしより、この邊り幾度かの地火噴出は先づピンチオの島を作り、ジニコロ、パラテノの邊相次で海上に樹林鬱蒼の島を作り出だしぬ。アルパニの噴火の灰に掩はれて、此等の島は漸く陸地相連り、あなたこなた深碧の湖水を湛え、テペロの河汨々この間を流

れ始めぬ。かくて氷河北地を蔽ひし時も過ぎ、この平野に木築え花咲きて、地中海の南風緑樹に薫じ、此の七丘に何處より來りけん、碧眼雪膚の人類棲み初めて、太古の森に斧の音きこえ始めぬ。

バラテノのこの丘に據りて濶達の性、武勇の質、中には一族相和してジエピタル天神に祈り、外は向ひの丘上のエトラスカンやサビン族と相對せしラテン語の一種族の中に會長ロムルス出でぬ。かれは天が噴火の灰にて作りなしたる堅牢の凝灰岩もてこの丘の周りに嚴めしき城壁を築きぬ。かれの雄圖はこの族の子孫に繼承せられて、種族膨脹の運と共に、婦女の缺乏はかれが後裔の間に大問題となりぬ。ロムルス城壁の下に一帶の濕地ありき。さなり、今こゝ脚下にきこゆる電車の響き、かの響きの起る町々は二千六百年の前には沼泥葦葭の地なりき。この沼を隔てゝかのキリナレの丘よりエスキリ子の丘を連れて住める一族サビンには美女多かりき。一夜

ムルス城壁より忍び出でし一隊の壯年、聲を潜めてかなたの丘に上りぬ。叫喚の聲と共に幾多のサビン婦人は夜暗の中にバラテノのこの丘に拉し歸られぬ。

越えて幾年か。サビンの婦人は曾ての敵を夫として愛情濃かに、その兒女は南歐の日光温なる處、父母の膝にラテン語をあやつり、その愛らしき小さき手には柑子の黄金色したるを弄びて平和の光りに浴びつゝありき。

城外俄に劍戟の響きあり。見ればサビンの兵勇磨きたる劍、厚き楯を手にして関の聲と共にバラテノの丘に迫り來ぬ。ロムルスの兒孫亦手に手に得物を携へ、牝狼の紋所かざして戦に應せんと城を出で行きぬ。サビンの女、今はローマ人の妻、皆驚いて戰場に馳せ行きぬ。劍戟相交はり、鮮血流れて修羅叫喚の街を現せんとするその一刹那、かれ等は各々の兒女を抱きて、かれ等の夫とかれ等の父兄との

間に立てり。サピン人と羅馬人とは闘ふに由なく、茲に和を約し盟を訂して共同平和の基を作りぬ。

ローマの基は此の如くにして二種族の盟訂に始まり、大帝國の基はサピン婦人の至誠の愛情によりて堅められぬ。天の攝理はこの兩種族の戦と和とによりて後に來らん大帝國の運命を定め、而して婦人の愛は能く平和と力との淵源なるを示さんとしてこの活劇を演せしめけん。

* * * * *

日くれてわれはこの思ひをたどりつゝ、バラテノの丘を下り、カピトルの下、街燈の光りに照らされたるその古の濕地を歩みて宿に歸りぬ。

十一月十三日、十四日。永遠の都(中)

今日は又寺々を見あるく。昔のミネルワ神殿の上に立てる聖母の御寺、シエイトの本寺、シエエの寺、さては六月に雪ふりしといふ聖母示現の大寺。古のバシリカ風の奥ゆかしさもあれば、近き世のパロンコの俗臭に飾られしもあり。新しき金箔きらめく壁の下にも千歳の瓦隠れ、ルチサンスの金籠の中には開教當時の殉教者の骨を納むるなど、異教のローマ、キリスト教の都、こゝには一片の柱、一塊の石も皆古今の歴史を語る。

ピンチオ (Pincio) の丘に上れば、こゝにも千歳の歴史眼下に集まる。悠々去つて歸らぬテベロの流れ。その水に影移す天使の塔が始めは大帝王の墳墓として築き上げられし時の莊麗如何なりけん。その墳墓も天使を祭る御寺となり、寺は又一變して兵營となる。その先に連る兵營の數々は今の王朝の威嚴を示せど、永遠の都遂に永へに王朝の都たるべきか。

丘に降れるボルゲーゼ (Borghese) の園には人影もなく、笠松の姿池の所に静かに、シプレスの木立淋しげに立つ。園を出で、馬車北に向ふ。路傍の小屋漸く疎にして都城の喧擾夢の如くに消え、身はカシニアの野、テペロの河畔に立てり。うら枯れたる野邊の景色、その間を通ずる一條の街道、道に傍ひて處々にうづ高き古墳の埴。野原の盡くる所、テペロの流を挾める丘上の古屋。その白堊と相映じて秋の空に濃く黒きシプレスの木々の梢。この間の風光は千秋相同じきも、世の興亡は幾度か彼方城壁の内なる都に移り行きけん。今過ぎ來しミルポアの橋の上を行き來する馬車の笳聲は古にかはらねど、彼の橋を過ぎてかなた千秋に聳ゆる聖ピエトロの高塔を指しつゝ、永遠の都に詣でし王侯、僧侶、文人の跡今何處にか尋ぬべき。山を過ぎ谷を亘り、チミノの幽谷を出で、峠の頂に立ちし時、彼等征客、巡禮の思ひや如何なりけん。見渡せばテペロの流れ蜿蜒丘陵起

伏の間を流れ、行く末は烟霞渺茫のキャンパニアの野原直に地中海の烟波に連る。而してその間一簇の黒圓林とも村とも見分かぬ間に巍然として空に聳ゆるは疑ふべくもあらぬ、聖教の礎、聖ピエトロの大聖母。その處に立ち、生まれてより常に夢寐に往來せし大聖堂の神々しき姿を數里の行手に眼前に見し時、あはれ何れの人か胸轟き心怦えて、「こゝにローマあり」Ece Roma を唱へたりしぞ。「あはれローマよ、我が國、我が心の都よ、Oh Rome I my country, I city of the soul! とは獨り憂憤詩人バイロンの聲にあらず。法王の寶座に跪きて極重罪惡の赦免を得んとて遠く來し褐袍繩帶の巡禮。ワチカノの歡心にて己れの王位を固め領土を完うせんと志し、王侯。又は道を求むる外に一點の邪念なく、使徒始め多くの殉教者が信の爲めに血を流せし跡弔はんと思へる虔信の修道僧。若くは又廢墟古殿の間に感慨を得ん爲め、又は石像、殿堂に残れる古美術に眼と腕とを養はん爲めに

永遠の都に志し、詩人書家。何れの人か始めてローマを見し時、この
感に打たれざりしぞ。

不思議の山河よ、神の都よ、世界に都は多きも、何れの都がこのローマ
の如く無数の人に無限の感を引き起さしむるものあらんや。永遠の都
も今は教會の都にはあらざれども、テベロの流れ、カンパニアの野は
古の儘にして、教會の聖殿は巍々としてその姿を改めず。我れにし
てこの教會の聖徒に列る身ならましかば、この境に立ちて泣きてん。
我れにギボンの才なく、ゲーテの筆なく、東海異教國の遊子、只獨り不
盡の感慨、自らもその何物なるやを知らずして沈思するのみ。

河の流れに沿ひ、野人の群と共に一茶店に入る。樂聲、歌舞を耳にし
つゝ、心は尙悵として古今の感に堪へず。一箋故國の友に書き送る。
「ローマ城内の擾々を避けてカンパニアの荒野にさまよひ、テベロの河
畔に田舎のカフェを飲む。ロムルスの子孫今は實に忌むべき民な

り。河畔に立てビエトロの高塔を望めば、興敗の跡に感限なし。
日も傾き始めぬ、河に沿ひ、城塞の間を過ぎ、野歌、牧笛を後にして都
城に入る。殘照薄赤く、聖殿を照らして、尖塔の金十字天に朝し、サチ
カノ丘下街燈の光霞みて暮し。

カピトリネ(Capitoline)の丘、プラカノの宮殿に、尙一日を古物繪畫の
中に送りぬ。歴史の跡、藝術の形見、見れども盡さず、書かんとすれば
筆及ばず。

今宵は満月に空も澄み、氣も静かなり。パイロンが跡追ひてコロ
セオ(Colosseo)に月を見る。

A noble wreck in ruinous perfection!

見亘す限り磊々の廢墟に、月光碧く荒涼の光りを放ち、一廓の壁、層々
の階段は、茲にこの世ならぬ寂滅の世界を作る。一時に爆發せし火

山口が一時に熄みて、後には死滅の冷水充つとや見ん。百千の天狗が岩を切り石を運びて天に達せん高塔を作ると見し夢の俄かに移りて魔女が一兎に生氣絶えし寥落の世に出でしやと云はん。空に遍き月もこの荒墟の中に入りては死の光りを漂はし、聲もなき夜中獨りその石塊の間に立てば我れ亦自ら生氣あるを覺えず。動かぬ碧光と聲なき大墟と、茲に寂黙の契りを結ぶ。 Hoary austerity of rugged Desolation とは眞にこの境か。されどこの荒墟も元は世の虚榮喧擾の生活の集まる所なりき。幾百の軍士が馬に乗りて技を競ひ、千々の乙女が花をかざして跳りしもこゝなれば、猛獸虎狼を放ちてその角鬮吞噬を恣にせしめ、松火の焔に幾多信神の人が焼き殺されしも亦この一廓の中なりき。それより後、城堡となり、病院となり、巫女の棲家ともなれば、修道の人の僧院ともなり、書工に畫かれ、詩人に歌はれ、あらゆる變遷を経しこの大墟はげに、弘き世に不思議の怪物とや

いほまし。

沈思とも分かず感慨とも分かぬ想ひに時も経て夜氣愈よしめやかなり。月影さし入る穹窿の下、孤影を友にして廢墟を出づれば外には人の世の燈火をちこちに閃く。

* * * * *

Arches on arches! as it were that Rome,

Collecting the chief trophies of her line,

Would build up all her triumphs in one dome,

Her Coliseum stands; the moon beams shine

As 't were its natural torches, for divine

Should be the light which streams here, to illumine.

The long-explored but still exhaustless mine

Of contemplation, and the azure gloom

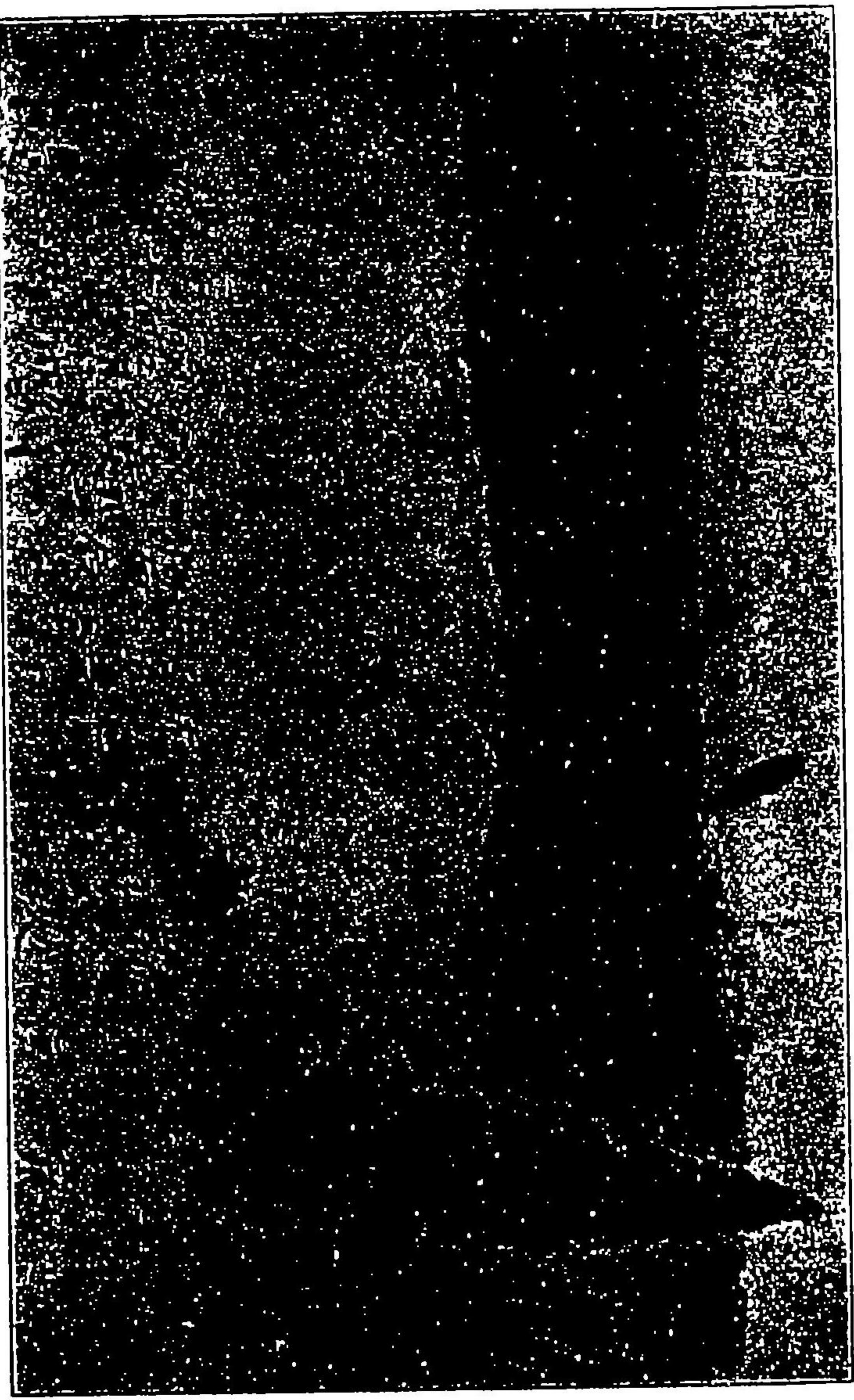
トリスチア 第三巻 第二回 神の宮

Of an Italian night, where the deep skys assume
 Hues which have words, and speak to ye of Heaven,
 Floats o'er this vast and wondrous monument,
 And shadows forth its glory. There is given
 Unto the things of Earth, which Time hath bent,
 A spirit's feeling; and where he hath leant
 His hand, but broke his scythe, there is a power
 And magic in the ruined battlement,
 For which the palace of the present hour
 Must yield its pomp, and what till ages are its dower.

* * * * *

十一月十六日。永遠の都(下)。

子ミの湖水、月の女神の鏡



(四八二頁参照)

法王の寶座ヴラカノに移りて、聖ピエトトの大堂今は教會の本山
なれど、その昔コンスタンタン帝がキリスト教を國教とし、ロマをそ
の永遠の都と定めし始めには、ラテラノ(Laterano)こそ教會の寶座な
りき。「町と世界と總ての寺々の母にして娘」 *Omnium urbis et orbis*
colesiarum Mater et Caput と銘打ちたるその聖ジョヴァンニの大堂も、秋の
空に淋しげに立ち、その昔聖フランシスと聖ドメニコとが相擁せし
堂前の石階に物乞の彷徨せるも哀れげなり。堂内、僧院、洗禮堂、何れ
も昔この寺の盛時をしのぶ種ならぬはなし。堂外の廣場より城壁
を越してカンパニアの眺めはるかにアルバニの山に連る。
アルバニの山湖に向つて汽車東に馳す。秋はカンパニアの野に
遍く、樺やポプラの木立おはれに風に靡き、古帝都水道の廢墟淋しく
も斷續して立つ。路漸く高く、山愈よ近く、山頂處々の町は城壁を廻
らし、層々相重なる家々の間に寺塔しるく秀づ。杉に似たるシブレ

スの姿、山の麓を色どるオリツの畑、北歐には見られぬ景。
山を上り盡せば眼下にアルバノの湖(Lago di Albano) 湛え、昔の火口壁、百丈の崖に圍まれて深碧の水鏡の如し。ガンドルン*(Castel Gandolfo)にて汽車をすて、馬車を火口壁の背に驅る。一方には底知れぬ湖水を見下し、一方にはカンパニアの傾斜遙に海に連る。眺めも遙かの野に灰を降らせし大火口も今は死せるが如き水を湛え、昔は凱旋の軍隊を迎へ、法王の行幸を見しアピアの大道に人影も稀なり。移り換はるは人の世のみにあらざりけり。

山の背を傳ひ、谷を渡りて、大道坦々。路傍處々の古寺、廢墟何れも懐古の種ならぬはなし。ベンザノを過ぎて道はネミ(Nemi)の湖上、火口の岨に出づ。こゝも深崖の山湖、月の女神の鏡と呼ばれし水の面には山々の影明かに映る。崖下に茂る杉の一群は古女神の宿りし所。この神の森にはそのむかし只一人の守僧住み、他の男子の入

るを許さざりき。若しこの守僧を殺して神樹の枝一つ折るものあらば、その人は又守僧となりて女神に事ふ。かくて神の宿りを守るものは、皆人を殺しては又人に殺され、血を流して代々相次ぎしとかや。世にも恐ろしき跡に今は人の影もなく、雑木の間、石柱の断片を見る。

山には秋風吹けど湖上には漣漪だになし。寂寞の世界に我れひとり、寂滅の山湖に俯仰感慨深し。

短き秋の日の早西に傾きぬ。車を返して元來し山をたどれば湖面には暮色こめて悲しげなり。汽車アルバノの火口を過ぐる時、十六夜の月、山の端を出でぬ。黑影の山に圍まれし湖面の水僅かに月の光に照らされて幽かなり。死の口、奈落の門とやいはまし。

* * * * *
あすはロマを去らんとて尙寺々見あるく。

最後にステファノの寺(S. Stefano Rotondo)壁に畫ける殉教者の數々を見て、城外に出づ。見上ぐる城壁に草茂り、番兵の淋しげに立てる外、人の影もなし。アピアの道をたどりてカリスト(S. Calisto)のカタコンブに着き、番僧が點す蠟燭の光りをしるべにこの地下の町を見る。尸體を納めたる棚の數々に、棺の残れるもあれば、壁畫のかすかに見ゆるもあり。この不思議の墓をしつらへ、その間に集まりては禮拜を神に捧げ、迫害を地下に忍びし初期のキリスト教者こそ、實に山をも移す信の活けるためしなれ。地下を廻りくへて地上に出づれば元の人界に返りしを覺ゆ。シプレスの並木を越して聖ピエトロの大塔遙に天空に聳ゆるを見、地下に密會して僅に信神の誠を盡せし教徒の團體が、終にかの宏大無雙の本山を建つるに至りし變遷を思へば、人の世の不思議とやいはん、神の力の神秘とやいはん。野邊を逍遙して農家の庭に息ひ村酒一杯に喉を濕ほす。かのカ

タコンブの中に聖餐の式を營みし初期のキリスト教徒も亦この邊りの野に生ふる葡萄の赤酒に、神の愛に渴する喉を濕ほしけん。アピア道をたどりて「何處に行きます」(Quo Vadis)の跡を見る。ロマの城内には迫害の怒風吹きすさみ、教徒の數々が日毎に火に燒かれ十字架の上に殺さるゝ時、年老ひし使徒ペテロは僅に身を以て逃れ、行くあてもなく城外のこの道をたどりし古を思へ。彼れが心には望みの光りも薄らぎ、世は末に近づきしとや思ひけん。さるにても彼れが不壞の信心一つは火をも恐れず、刀刃をも避けず。彼れがさまよひてこゝに來りし時、忽然としてキリストの姿現はれぬ。彼等は思はず踏み止まりて主を見れば、主は飄乎としてロマ城内に向つて消えぬ。「主よ、何處に行きます」。この一語は疑問にして疑問にはあらざりき。老使徒は直に心を決し、再び城内に向ひて身を虎口に投じぬ。この跡に今は小さき祠堂立ち、堂内には主の足跡といふを

印す。村寺のあはれに野中に立てるこの地點、是れ亦世の不思議の跡なり。

セバステアン門 (Porta S. Sebastiano) 今は殉教兵卒の名を冠すれど、古は番兵が出入を監視しこの門一つも世を忍ぶ教徒には一つの虎口なりけらし。野外の眺めに千九百年の古を想ひつゝ、城壁に沿ひて聖パオロの門 (Porta S. Paolo) に出づ。此も使徒パオロが刑場に牽かるゝ時最後に過ぎにし城門。殉教者歩む所には信仰の種を蒔きし跡。この邊りの野邊は是れ盡くキリスト教勃興の跡を語らざるなし。

城壁の下、シプレヌの木立影暗き處に詩人シエリーの墓を弔へば、夕暮の風しめやかなり。

十一月十七日。ローマの別れ、ナポリの夕。

永遠の都も今日は別れ。

Therefore farewell, ye hills, and ye, ye envineyarded ruins!

いざさらば、丘よ、蔓生ふる廢墟よ

いざさらば、壁よ、宮居よ、石の柱よ、……

いざさらば、野よ山よ、いざさらば永遠の都よ。」

汽車は永遠の都を後にして荒野を馳せ、アルバニの麓より見亘すかなた遙に聖ビエトロの大堂母が天に冲するを見る。山角一轉、その莊嚴の姿も消え失せ、夕日影薄く山嶺の城壁を射て、多感の遊子獨り思ひに沈む。

あはれ、永遠の都、此もこの世の人なる我れには暫しの夢なりき。法王の寶座、神の都、此も有爲轉變の世の數には漏れで、古を弔ふ征客の胸に一點の愁となりて残る。「高山も崩れ、大海も涸れぬ、永遠の都いつまでか神の都ならん。過ぎしローマの光榮も、悵悵の種。我が幾

日かの帝都の遊びも、今將た追懐の雲霧に入り去らんとす。されど
 悵恨、追懐、此れ亦永遠の呼吸の一息にあらずや。轉變の中にも久遠
 の姿あり、有爲の人生に即ち神の力あり。
 汽車は夢を載せて身はナポリに入る。海に沿へるホテルの食堂
 に赤酒を傾く。欄下にイタリア樂手がチタラに合はせて歌ふ、アデ
 オ、アデオの聲悲しげに、陶然の恍惚を破り、缺け始めたる月は破雲の
 間より漏れて、海平の一方にこの世ならぬ白光を漂はす。我が身か
 の光に乗じて天に上れよかし。

十一月十八日。ボンベイ。

市中少し見あるく。大通りの繁華壯麗に引きかへて、横町、裏家の
 醜穢目もあてられず。そのあたりの民風が日本に似たるもをかし。
 汽車ボンベイに向ふ。郊外の村々家並み漸くまばらに、エスネオ

の山近く、右は碧海の上にカプリの青螺浮び、秋の空にも日の光うら
 らかに、山嶺の噴煙手に取る如し。車を下りて丘陵起伏の間に立て
 ば、身は既に千數百年前の慘劇の跡にあり。見あぐるエスネオの高
 岳屹として威嚴を加ふ。

門を過ぎて發堀の跡に入る。第一の低き城門をくゞりて狭きマ
 リナの町に入れば、兩側の石垣灰色を帯び、死の都に入りたる心地自
 ら凄凉なり。發堀したる古物尸骸の陳列もそこ／＼に、案内の喧き
 に答へもせず、行きすぎて、パシリカの斷柱の間に彷徨し、フォロの廢墟
 に憑りて天父の拜壇を望めば、エスネオの山巍然として面に當つて
 聳え、噴煙は一群、二群風に靡きて碧空に消え行く。この都府が彼の
 山の噴き出せし流岩に蔽はれ、幾萬の生靈が毒氣熱灰の中に焦熱の
 叫喚を呈せし一瞬前までは、このフォロの遊りに行人絡繹として、天父
 の壇下香煙盛に立ち登り、參詣の民衆は仰で山靈の威徳を思ひ、俯し

て天父に福德を祈りしなるべし。ましてやこの町に玉の樓を張り、酒池肉林の榮花を極めし人々は、その住家が千年の後に土灰の中より發掘せられて、其房中壁上の春畫が衆人の觀覽に供せられ、その尸骸が博物館裏に陳列せられんと、如何にして想ひ得しや。人事の測るべからざる多くこの類にあらずや。

思に沈みて獨りかなたこなたに彷徨す。テアトロの邊り城壁の上、南ソレントの岬を眺むれば、山や海や太古の姿變らず。古家の跡には門頭の柱石、屋内の敷石、さては又壁上の繪畫、店頭石棚、皆寂寞の中に横はりて無聲に今昔の變を語る。北の方城門を出づれば、エスオの裾野遙に山頂に連なりて、丘陵の間に、一路低く、發掘の跡を示す。その兩側の墳墓、紀念碑は色こそ灰に浸みたれ、穹窿臺柱の優美なる形その儘に、彫刻銘文ながら昨日彫りしに似たり。北邙當年の墓碑終に人の柱下に石とはならざりしも、千年の下徒に他邦遊

覽の人に弄ばれて、不祀の鬼となれる地下の靈、その子孫は一時の噴灰に燃死し、碑石却て後代に遺る。一生一死の外、人は自らも知らぬ運命を有するか。一墓前、白大理石の臺に坐して靜に瞑目すれば、丘上樹頭の風、死の囁きをなし、目を放てば、碑石聲なく、山は悠々として白煙を吐く。

墓色野を蔽ひ、死の都に夕風凄し。汽車ナポリに歸り着けば、こゝには電燈の光焔々として車馬織るが如し。ホテルの食堂に酒杯を舉げ、チタレの悲しき音をき、つゝ、獨りかの廢趾の夜を想ふ。

十一月十九日。歐洲の別れ、ナポリの船出。

再び市中を周り歩き、博物館に入る。ボムペイ發掘の壁畫の數々、色は稍々焼けたれど、當年傲奢の跡明かに見るべし。聖エルモの丘上に中食し、驟雨の中に地中海の煙波を眺め下す。ホテルに歸りて

歐洲大陸の最後を惜み、珈琲を傾けつゝ、四方に消息す。

二年半の住居なりし歐洲の地を僕は今去らんとす。一度足を揚げて身を船に投せば、身は既に歐洲の人にあらず。二年半の前にメッシナの海峡を通過せし時は、僕は未だ歐洲文明の何たるを知らざりき、否、僕自らをも知らざりしなり。今夜僕の船が同じメッシナの海峡を過ぐる時、舊の山河に對して僕は何をか語らん。歐洲近世の文明が空虚なるを知り得しは、僕の二年半滯歐の勞を無に歸するやも知らざれど、而も眞理は古しの一語を體し得しは、稍自ら慰むるに足らんか。歐洲の土を去るに臨んで、君に一簡を寄す。

この書簡が心友に達する時、かれは莞爾としてわが述懐に笑まんか。歸郷の日かれと手を携へて、湘南の濱に遊ばん時、かれがこの三年間の述懐如何ならん。抑も亦、何れの日かわれとかれと相携へて

この地に遊び、共に歐洲古今の文明を談ずるを得ん。

燃ゆるが如かりし夕日影も薄らぎぬ。時は迫りぬ。車を驅りて波止場に行く。願れば聖カルロのドーム影の如く夕べの空に聳え、行く手の港灣には紅白の船燈閃々水に落ちて螢に似たり。

手荷物は輕舸に移されぬ。見送りの僕は去りぬ。わが身は船に移らざるべからず。足歐洲の土を離るゝと共に舟子は櫂を揚げ、舟は搖々として岸を離れぬ。舷を打つ水の音靜かに本船は已に近づきぬ。

船に上れば水夫、給仕の甲板を行き交ふ様忙はしく、船室には船客の談笑湧く。

汽笛吼ゆるが如く鳴りぬ。舵を廻はす音す。甲板に出づれば船首已に陸に背けり。思ひを残したる歐洲の地、今や一刻一刻われに遠ざかり行く。ロヘングリンが別れの樂譜心に聞こゆ。

陸上の燈火益々薄く、海上の波濤漸く高し。見れば月は左舷の洋上に見え初めぬ。嗚呼われは終に美はしのイタリヤを辭せしなり。音樂の郷なる歐洲に離れしなり。而して行く手はいづこ、五天雲茫漠、故土亦この孤憤の驕兒を容るべきか。嗚呼、天涯地角われやいづこに満足の地を得べき。脚下潮濤黒く、月獨り洋上に明かなり。

外篇第二

パリからロンドンへ

一と寝入りしたと思ふ間もなく車掌にゆり起された。汽車はベルギの境に入つて人々はフランス語を話してゐる。暫くの間遠ざかつて居たフランス語をきいて、已にパリに歸つた心地がする。又寝入つて目がさめると、今度は夜もほのくくと明け、霧が四方に立ちこめて居る。汽車はフランスの境内に入つて、税關吏が荷物を改めに來た。夜はあけてあかるいが、まだ時は四時半、顔を洗つてからもうつらくと寝る。霧もはれ始めて、日光が見える。野には深紅のけしが咲き亂れ、緑葉の木々が畑の間に連る。北フランスの岡の景色は稍イギリスに似てゐる。その中に霧にかすんだ空にモンマルトルの寺が日光に映じて、白赤く天に聳えて見える。七時半に汽車はパリに着いた。

Earth has not anything to show more fair:
Dull would he be of soul who could pass by
A sight so touching in its majesty:
This City now doth like a garment wear

The beauty of the morning: silent, bare,
Ships, towers, domes theatres, and temples lie
Open unto the fields and to the sky,—
All bright and glittering in the smokeless air.

Never did sun more beautifully steep
In this first splendour valley, rock, or hill;
Ne'er saw I, never felt, a calm so deep!

This river glides at his own sweet will:
Dear God! the very houses seem asleep,
Add all that mighty heart is lying still!

—Wordsworth.

馬車でクリューニーの宿に向ふ。パリの町々は朝早くに店や事務所に行く人で賑かに、並木の緑の影にはカフェの店先きにゆふべ徹夜の跡掃除をしてをるのもあれば店先に品物を陳列してをるのもある。人と車、並木に日光、早朝のパリの繁華は、夕方の繁華と違つて勤勉奔營のしるしである。

宿に着いて人々にも會ひ、それから山崎君の處に行き、日本食で一緒に中食して、半日は郵便や荷物の事にくらした。

六月三十日から七月六日。心友の家プロニのクラブ。

この一週間は荷物の仕別けと訪問とでくらしした。税關に荷物をとりに行くやら、室で荷物を出したり入れたりするやら、實に面倒。イタリアで買つて來たものを一度出して眺めると、暫く會はなかつた子供に會ふに似てをる。それを又荷造りする、同じ様な事を何度

繰り返すか。荷物の面倒をする度に、人生の行旅もこんなものだと考へる。自分のものと考へて居るものも常に身の側におくわけには行かない。離れては會ひ、會ふては終に離れる、人間の執着は妙なものである。

ガルニエ(M. Garnier)の家には三度行つた。着いた日に行つたが家内皆留守、次に行くにチュリンゲンから持つて歸つた土産物をエヴリヌ(Eveline)が並べて遊んで居る。四ヶ月の間に大分大きくおとなびで、おちさんが歸つて來たといつても少し恥かしさうにする。

此頃は來年になれば日本に行く、日本に行つたらおちさんの正見坊や種坊のおつむを撫で、やる」といつてをるとの事。正見や種世の名を覚えてをるだけでも可愛い。實に伶俐な子で、何もかもよく知つてよく覚えてをる。三日には夕食に招かれて、日のくれに行くと、エヴリヌは床の中に這入つては居るが、まだ目をさまして人形を相